

久留間カミ塚遺跡B地点

——佐賀郡大和町——

(参考資料 池上遺跡)

1982年3月

佐賀県教育委員会

久留間カミ塚遺跡B地点

——佐賀郡大和町——

(参考資料 池上遺跡)

1982年3月

佐賀県教育委員会

はじめに

この調査報告書は、一般県道松尾・佐賀停車場線建設に先かけて、佐賀県教育委員会が昭和56年度に実施した、佐賀郡大和町「久留間カミ塚遺跡」発掘調査の記録であります。

当遺跡は、昭和25年松尾楨作・七田忠志先生方によりすでに学術調査が行われ、弥生時代の住居跡等から多量の土器が出土したところとして広く知られております。今回は、同じ弥生時代の埋葬跡を確認しておりますので、今後この地域の原始時代集落の様子をうかがう上で貴重な資料になるものと考えます。

ここに調査報告書を刊行することになりましたので、郷土史の研究及び文化財保護、その普及のためご活用いただければ幸いです。

なおこの調査に終始御尽力下さった県道路課、大和町教育委員会並びに地元の方々に厚く感謝申し上げます。

昭和57年3月

佐賀県教育委員会
教育長 古 藤 浩

例　　言

1. 本書は、昭和56年4月16日から6月8日までに佐賀県教育委員会が、佐賀県土木部道路課からの依頼で発掘調査した久留間カミ塚遺跡の報告書である。

2. 発掘調査は佐賀県教育委員会が実施した。

3. 本書の執筆は次のとおりである。

I 高瀬哲郎

II 1・2 西田和己

3 高瀬哲郎

III 高瀬哲郎

IV 多々良友博

4. 本書作成の作業分担は次のとおりである。

遺構実測 内山ヒロエ・城政子・納富ミサオ・藤井千枝子・野田セキ子・東島良子
西田和己・川谷昭彦・高瀬哲郎・松尾吉高

遺物実測 山本タカ子・友清淑子・松崎恭子

製図 山本タカ子・山崎美紀子・貞包洋子・本田京子・高瀬哲郎

復元 村瀬邦子・広瀬敏子・高畠澄子・土井マサ子・宮崎礼子・古川万鶴代・
新井久美・池田覚子

遺構写真 西田和己・原口定・高瀬哲郎・松尾吉高

遺物写真 原口定・古賀栄子

編集 多々良友博・高瀬哲郎・本田京子

凡　　例

1. 遺構については各遺構ごとに一連番号を付し、その前にS J：表棺墓、S R：祭祀遺構、
S P：土壤墓、S K：土壤、S D：溝、S X：その他の遺構の分類記号を標記する。

2. 遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位である。

3. 遺構出土の遺物に関しては、遺物実測図の個々の番号の下に遺構番号を記した。

目 次

I 調査の概要	
1.調査の経過	2
2.調査組織	2
3.調査日誌	2
II 遺跡	
1.遺跡の概要	3
2.遺構	
(1)遺構の概要	8
(2)埋葬跡	8
(3)祭祀遺構	14
(4)その他の遺構	14
3.遺物	
(1)遺物の概要	18
(2)埋葬跡出土の弥生土器（甕棺）	18
(3)祭祀遺構出土の弥生土器	21
(4)その他の弥生土器	24
(5)溝・土壤・土壤墓・その他出土の土師器	24
(6)その他の遺物	27
III まとめ	30
IV 参考資料 ——大和町池上遺跡——	31

挿図目次

Fig. 1 久留間カミ塚遺跡位置図	3
Fig. 2 久留間カミ塚遺跡周辺遺跡分布図	5
Fig. 3 久留間カミ塚遺跡遺構配置図	7
Fig. 4 久留間カミ塚遺跡SR02祭祀遺構実測図	14
Fig. 5 久留間カミ塚SR01祭祀遺構実測図	15
Fig. 6 久留間カミ塚遺跡SK02・05・06・11・12土壤実測図	17
Fig. 7 久留間カミ塚遺跡出土甕棺実測図(1)	19
Fig. 8 久留間カミ塚遺跡出土甕棺実測図(2)	20
Fig. 9 久留間カミ塚遺跡出土弥生土器実測図(1)	22

Fig.10	久留間カミ塚遺跡出土弥生土器実測図(2).....	23
Fig.11	久留間カミ塚遺跡出土土師器・青磁実測図.....	25
Fig.12	久留間カミ塚遺跡SR01祭祀遺構出土鉄錆実測図.....	27
Fig.13	久留間カミ塚遺跡出土土師器拓影.....	29
Fig.14	池上遺跡遺構配置図.....	33
Fig.15	池上遺跡甕棺墓実測図(1).....	35
Fig.16	池上遺跡甕棺墓実測図(2).....	36
Fig.17	池上遺跡出土甕棺実測図.....	38

表 目 次

Tab. 1	久留間カミ塚遺跡甕棺墓一覧表.....	12
Tab. 2	久留間カミ塚遺跡土壤一覧表.....	16
Tab. 3	久留間カミ塚遺跡出土甕棺一覧表.....	27
Tab. 4	池上遺跡甕棺墓一覧表.....	34
Tab. 5	池上遺跡出土甕棺一覧表.....	36

図 版 目 次

PL. 1	久留間カミ塚遺跡遠景、全景
PL. 2	久留間カミ塚遺跡全景、同甕棺墓群
PL. 3	久留間カミ塚遺跡東地区、同西地区
PL. 4	久留間カミ塚遺跡SJ03・04・09甕棺墓
PL. 5	久留間カミ塚遺跡SJ05・06甕棺墓
PL. 6	久留間カミ塚遺跡SJ07・08甕棺墓
PL. 7	久留間カミ塚遺跡SJ11~13・15甕棺墓
PL. 8	久留間カミ塚遺跡SR01・02祭祀遺構、SP02土壤墓
PL. 9	SC01箱式石棺墓、SP04土壤墓、SD07溝
PL.10	久留間カミ塚遺跡SJ03・04・09・12・15甕棺
PL.11	久留間カミ塚遺跡SJ05~07・12・15甕棺
PL.12	久留間カミ塚遺跡SR01・02祭祀遺構、SK10土壤出土弥生土器
PL.13	久留間カミ塚遺跡SD07・11溝、SP04土壤墓出土土師器、SR01祭祀遺構出土鉄錆
PL.14	池上遺跡調査区全景、SJ01・03・04・06~08甕棺墓
PL.15	池上遺跡SJ01・03・08甕棺

久留間力ミ塚遺跡

I 調査の概要

1. 調査の経過

佐賀県土木部道路課は、昭和56年度に佐賀郡大和町大字久留間地区の一般県道松尾佐賀停車場線の道路改良工事（延長900m）を予定していた。しかし、この地区は「久留間カミ塚遺跡」¹⁾という周知の遺跡であるため、佐賀県教育委員会文化課は道路課と55年度未協議を行い、まず昭和56年4月当初に現地踏査を実施することになった。その結果、予定路線内に弥生土器の散布がみられたため、試掘による遺跡範囲の確認調査を行い、発掘調査地域を決定した。調査対象地域は大和町大字久留間字二本松一帯で、東平川中流にかかる竜喰橋の西方約100mの地点である。調査面積は、南北（路線）幅約12m、東西（路線）長約60mの区域の約700m²である。また調査は文化課文化財調査第一係が、昭和56年4月16日から6月8日までの約2ヶ月間行った。

2. 調査組織

調査委託者 佐賀県土木部道路課

調査受託者 佐賀県教育委員会

調査事務局 佐賀県教育委員会文化課（課長 藤山巖）

調査員 高瀬哲郎（文化課指導主事）・西田和己（文化課文化財保護主事）・原口 定（文化課嘱託）

調査作業員 坂田幸子・内山ヒロエ・城政子・原京子・納富ミサオ・北村ヒロ子・西原和子・太田アサエ・野田ミチ子・大坪エイ・副島ツルエ・池田ヨシノ・橋本テルミ・池町秋代・上滝テルミ・大家フサ子・大家泰子・大家ユリ子・永瀬ユキ子・北島ヒロ子・藤井千枝子・野田セキ子・東島良子

3. 調査日誌

昭和56年4月16日～22日 バックホーで調査区東側から表土はぎを始める。

4月22日～28日 遺構検出作業。甕棺墓や土壤墓を確認する。

4月28日～5月15日 甕棺墓や土壤墓を掘り下げる。その後写真撮影。

5月16日～20日 出土遺物（土器）洗い。実測のための基準杭打ち。

5月21日～25日 調査区域を20分の1で実測。

5月25日～6月6日 甕棺墓、石棺墓、祭祀遺構などの個別実測。土器実測のための選別作業。

6月8日 調査全て終了し、撤収。

註1. 松尾植作・七田忠志「久留間遺跡調査概報」『佐賀縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第10輯 佐賀県教育委員会 1951

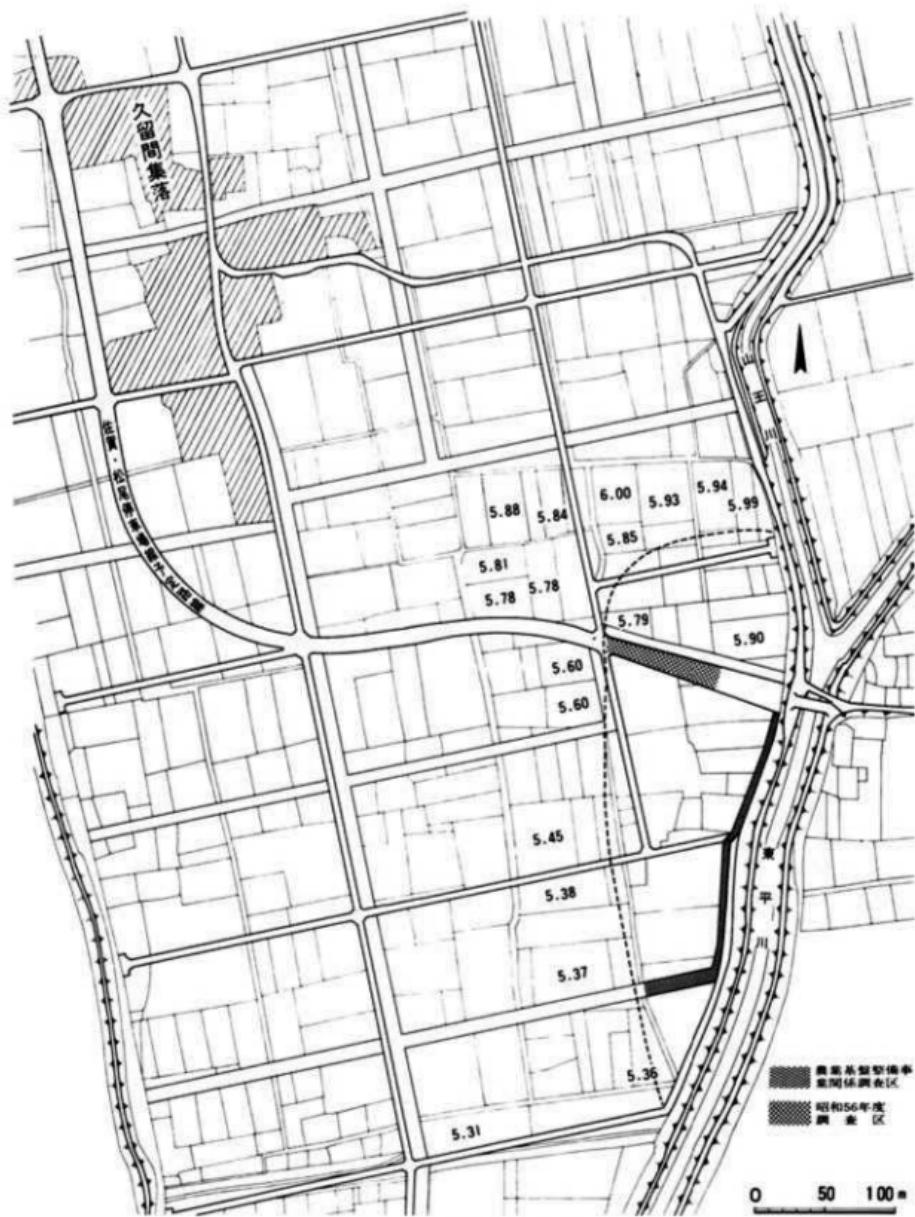


Fig. 1 久留間カミ塚遺跡位置図

II 遺 跡

1. 遺跡の概要

久留間カミ塚遺跡は、佐賀都大和町大字久留間字二本松に所在する。大和町は、佐賀平野のほぼ中央、佐賀市の西隣りに位置している。町北部は脊振山地南斜面から派生した鬼原山・金敷城山・高取山・春日山などの低い山々が点在する山間地域であり、それらの山々は裾野をゆるやかに南方に延びて、いくつかの舌状台地を形成している。一方、町南部は有明海の海退によって広がっていった佐賀平野部の一部であり、標高は10m前後である。このような地形により、町周辺をはしる河川のほとんどは北から南へむかってゆるやかに流れている。その一つ、嘉瀬川は脊振山地に源を発する河川であり、上流の名尾川・小刷川・天川・袖木川などを合流して山間部を下って嘉瀬川となる。山麓部では多布施川など数本の用水が派生する。久留間遺跡はこの嘉瀬川の右岸の沖積平野にある。本遺跡のすぐ東側を流れる東平川はそのひとつである。現在では両岸に長く堤防が造られており、穏やかに流れているが、過去においては西の平川とともに度々氾濫していたといわれる。標高5.7mほどしかない久留間一帯は、この両川に挟まれているため平野部でも、やや湿地帯である。古代においてはこの自然環境に大きく左右されたのか、山麓部ほどには遺跡の規模は大きくなく、微高地を中心にあちこちと小規模に点在することが多い。

さて、そこで大和町周辺の遺跡の分布状況をみていくと、町中央部つまり山麓部の低丘陵地帯に密集しており、町南部の平野部に下るに従って密度が低くなっている。また町北部の山間部では中世の山城跡が中心で、縄文・弥生時代の遺跡はわずかにみられるにすぎない。

先土器時代の遺跡は久池井一本松遺跡だけである。周辺地域においても、佐賀市梅ヶ谷遺跡、富士町地蔵平遺跡、小ヶ倉遺跡、三日月町老松山遺跡、岡本遺跡などしかなく、少ない。三日月町の2遺跡ではサヌカイト原石を産する。

縄文時代の遺跡は48ヶ所あるが、出土遺物が少ないし、本格的な発掘調査も行われていないため詳細は不明である。遺跡は小限遺跡、大願寺遺跡、今山遺跡、春日遺跡、出羽遺跡など、舌状台地上に多く分布している。遺物は押型文土器、曾畠式土器、阿高式土器、後晩期土器や石器、石斧などの打製石器が主である。

弥生時代の遺跡は128ヶ所と急増するとともに、範囲も広くなってくる。遺跡は嘉瀬川左岸に憩座遺跡、南小路支石墓¹²、右岸に久留間遺跡、池上遺跡、七ヶ瀬遺跡¹³、それに久留間カミ塚遺跡など、その他舌状台地から平野部にかけて広く分布している。

南小路支石墓は佐賀平野部で最初に調査された支石墓で、下部構造は弥生時代前期の合口墓¹⁴である。

久留間遺跡は昭和25年に九州総合文化研究所が調査したもので、堅穴住居跡や多数の土器な



Fig. 2 久留間カミ塚周辺遺跡分布図

- | | | |
|-------------|-------------|--------------|
| 1. 西隈古墳 | 11. 肥前国分尼寺跡 | 21. 七ヶ瀬遺跡 |
| 2. 森の上古墳群 | 12. 銅戈出土地 | 22. 下戸田遺跡 |
| 3. 久池井一本松遺跡 | 13. 南小路支石墓 | 23. 久留間遺跡 |
| 4. 磚石遺跡 | 14. 西山遺跡 | 24. 池上遺跡 |
| 5. 前隈山古墳 | 15. 大願寺廃寺跡 | 25. 風来寺古墳 |
| 6. 都渡城遺跡 | 16. 今山遺跡 | 26. 風来寺南古墳 |
| 7. 憑座遺跡 | 17. 船塚古墳 | 27. 道善寺古墳 |
| 8. 肥前国分寺跡 | 18. 男女山古墳群 | 28. 桥田遺跡 |
| 9. 肥前国分寺跡 | 19. 向坂山古墳群 | 29. 橋田三本松遺跡 |
| 10. 萩山古墳 | 20. 西野角古墳群 | 30. 久留間カミ塚遺跡 |

どを発見している。本報告の久留間カミ塚遺跡は南へ約50mほどしか離れていない。

七ヶ瀬遺跡や池上遺跡は複数墓を主にする遺跡である。

集落跡についてはまだ解っていないが、遺物の散布や今までの調査から、久池井地区及び尼寺地区を中心とした低丘陵部に一大集落跡の存在が考えられている。

遺物では特に南小路遺跡出土の広形銅鏡および嘉瀬川河床と悠座遺跡出土の鏡が注目される。^{注2}

古墳時代の遺跡は149ヶ所で、分布的には弥生時代とさほど変わらない。ただ、古墳の立地が山の斜面や丘陵頂部などに集中し、垂直的分布が見られる。

この地域で注目されるのは、船塚・池の上古墳、前隈山古墳など前方後円墳が他地域に比べて多いことである。佐賀県では現在までに40基余の前方後円墳が確認されているが、その内10基が嘉瀬川両岸一帯に存在する。特に船塚は全長114mの県下最大の前方後円墳で、周囲に7基以上の陪塚をもつ。これらを含めて、この地域の古墳は県下でも古い様相を示している。しかし、6世紀を境にこれらの古墳からみた勢力圏は他の地域へと移っていくようである。

奈良・平安時代の遺跡は124ヶ所で、山麓裾部や平野部など平坦なところを中心として分布する。古墳時代後期に一時低落しつつあったこの地域の勢力が、肥前国府、国分寺、国分尼寺、大願寺の設置にみられるように、再び盛り返される時代である。肥前国府の中心となる国府については、現在も調査を継続中であるが、従来の文献史学や地理学など各方面から推定されていた諸説に再考を促す成果をあげている。これまでの調査から、悠座地区南の微高地域に国府城を考えている。^{注3}

中世以降は、分布的にはまた奈良・平安時代とはほとんど変わらないようである。

遺構をみると、春日山城跡、実相院遺跡、西山遺跡など寺院跡や城跡関係のものが多い。

以上のような地理的・歴史的環境の中にあって、平野部低地に位置する久留間カミ塚遺跡は弥生時代の複数墓を中心とした遺跡として確認された(PL.1-2)。遺構は弥生時代の複数墓15基、石蓋土壙墓1基、土壙墓1基、祭祀遺構2基、箱式石棺墓1基、土壙6基、歴史時代の土壙6基、土壙墓2基、溝12条、不明遺構1基の計47である(Fig. 3, PL. 3)。一帯が水田として耕作されていたため、遺構の残存状況は良くない。特に複数墓の大半は、遺構の半分以上の深さまで削平されており、痕跡しか残っていないものもある。石蓋土壙墓、土壙墓のうち2基は、規模から小児用と考えられ、小型である。埋葬祭祀遺構は、この周辺で初めて確認された例であり貴重な資料である。また、溝が区域外にも延びているようだが、何に用いられたのか性格は不明である。遺物はやはり複数が大半を占める(PL.10-13)。他には、祭祀遺構の土器と土壙墓に共伴する土器がみられるだけで、溝からも遺物は少ない。また祭祀遺構から鉄器が一点発見されている。以下、その詳細についてみていく。

注2. 稲渡敏雄他「肥前国府跡I」 佐賀県教育委員会 1978

注3. 木下之治「脊振山脈南麓で初めて発見された大和町南小路支石墓」 新郷土301号 1971

注4. 七田忠昭「七ヶ瀬遺跡」 大和町教育委員会 1981

注5. 松尾耕作「佐賀県考古大観」 1957

注6. 田平信栄他「肥前国府跡II」 佐賀県教育委員会 1981

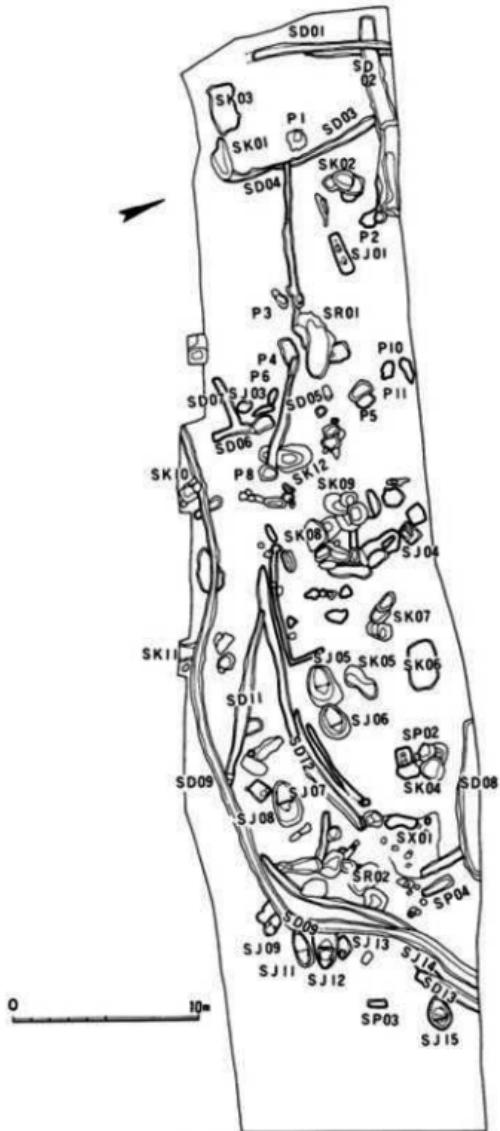


Fig. 3 久留間カミ塚遺跡遺構配置図

2. 造構

(1) 造構の概要

今回の調査で検出した造構は、斐棺墓、土壙墓を中心とした埋葬跡、祭祀造構、土壙、溝などである。從来この地は小丘状をなしていたが、近年の耕地整理時に削平を受けている。このため、造構の残存度は悪い。なお、調査区の東側と西側にもトレンチを入れたが、表土下は東側が砂層、西側が灰青色粘土層で造構は確認できなかった。

造構は弥生時代のものと歴史時代のものとがある。

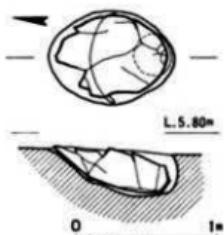
弥生時代の造構は、斐棺墓15基、土壙墓2基（うち1基は石蓋土壙墓）、箱式石棺墓1基からなる埋葬跡とそれに伴う祭祀造構2基、土壙6基がある。

歴史時代の造構は溝12条、土壙基2基、土壙6基の他、掘立柱建物の柱穴と考えられる小穴がある。平安時代に属するものとしては土壙3基、溝1条、鎌倉～室町時代では溝3条がある。他の造構については、遺物も小破片あるいは出土をみなかつたりで、時期を判断しにくいかぎり合い関係などからして平安時代以降と考える。

調査区は区域が限定され、造構の全容はつかめなかつた。ただ調査区東側および西側では確認できず、前年度の調査区からみて、遺跡は南側へ広がっていると推測される。

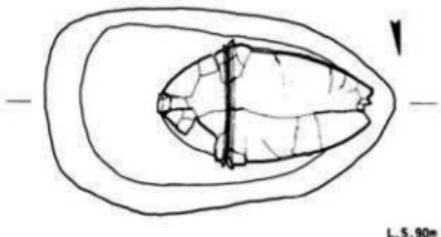
(2) 埋葬跡

S P01・04土壙墓が歴史時代に属する他は、弥生時代の埋葬跡である。斐棺墓15基、土壙墓2基、箱式石棺墓1基がある。斐棺墓15基のうち石蓋单棺1基を除いて複式斐棺を埋置している。棺のうち小児棺は5基ある。棺の組み合わせは、鉢+斐、斐+斐、壺+斐がみられ、いずれも接口式で粘土目貼りを施すものもある。土壙墓のうちS P02土壙墓は石蓋が残存している。これらの墓域の範囲は不明であり、また配置については規則性はみられなかつた。



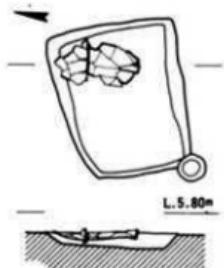
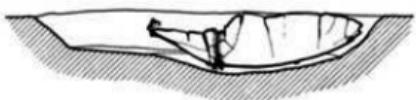
S J03斐棺墓 (PL. 4-1)

調査区中央部SD07溝の北側に位置している。棺上部は削平を受け、棺下部のみ残存する。傾斜角は36°と斐棺墓15基のうちSJ04斐棺墓とともに大きな角度をもつものである。棺は斐を用いており、単棺の可能性もある。主軸方位N-W 7°



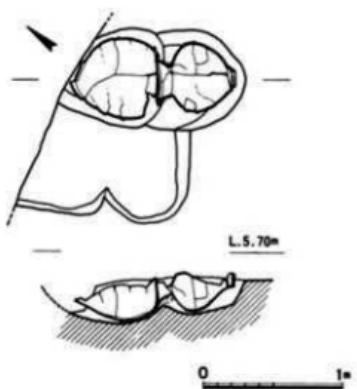
SJ07斎棺墓 (PL. 6-1・2)

調査区東側部分に位置する。墓壙を一段掘り込み、さらに埋置部分に二次孔を掘り、上蓋が鉢、下蓋が窓の接口式斎棺をほぼ水平に埋置している。墓壙は長さ2.51m、幅1.46m、深さ0.32mあり、埋置部分は0.1mの掘り込みを行っている。粘土目貼りを施す。主軸方位S-E82°。



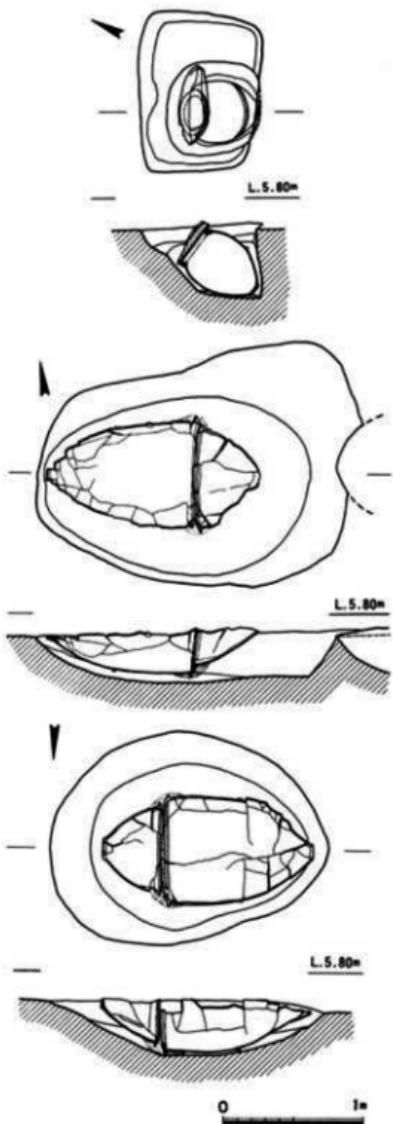
SJ08斎棺墓 (PL. 6-1・3)

SJ07斎棺に隣接する小児棺である。墓壙は平面方形で、長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.11mあり、墓壙の北側隅に上下とも窓を使用した接口式斎棺をほぼ水平に埋置している。主軸方位N-W13°。



SJ09斎棺墓 (PL. 4-3)

調査区東側に位置し、SJ10・11斎棺墓に隣接する。棺上部は削平を受け、墓壙西側はSD09溝に切られている。上蓋は広口鉢、下蓋は窓を使用した接口式小児棺を埋置し、接口部には粘土目貼りを施す。傾斜角5°、主軸方位S-E38°。



SJ04要棺墓 (PL. 4-2)

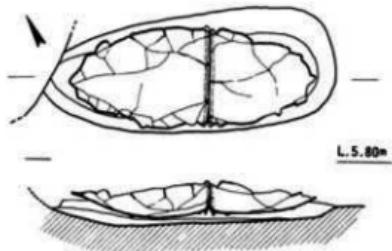
調査区中央部に位置し、この1基のみ棺上部の削平を受けていない。墓壙は長さ1.15m、幅0.87mの平面長方形であり、さらに長さ1.32m、幅1.3m、深さ0.64mの横壙を南側壁に穿ち、妻を埋置し、1枚の板石を使って蓋をしている。蓋石と妻の接合部には粘土目貼りを施している。傾斜角38°、主軸方位N-W26°。

SJ05要棺墓 (PL. 5-1・3)

調査区東側部分に位置し、SJ06要棺墓と切り合っている。棺上部は削平を受けた。墓壙は残存法量で長さ2.3m、幅1.75m、深さ0.4mある。上妻は鉢、下妻は妻を使用した接口式旗棺をほぼ水平に埋置し、接口部には粘土目貼りを施している。主軸方位S-E72°、SJ06要棺墓より古い。

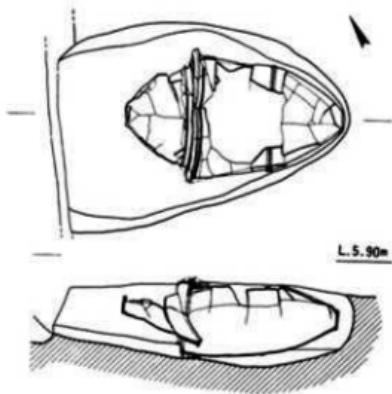
SJ06要棺墓 (PL. 5-1・2)

SJ05要棺墓に隣接し、墓壙はSJ05要棺墓を切り込んで掘られている。平面楕円形で残存法量は長さ1.98m、幅1.5m、深さ0.41mある。上妻は鉢、下妻は妻の接口式旗棺をほぼ水平に埋置している。接口部には粘土目貼りを施す。主軸方位S-W87°。



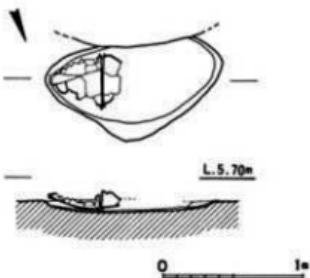
SJ11櫛棺墓 (PL. 7-1)

SJ09-12櫛棺墓と切り合う。上下とも甃を使用した接口式櫛棺である。墓壙西側はSD09溝に切られている。墓壙の残存法量は長さ2.1m、幅0.85m、深さ0.15mある。主軸方位S-E 60°。



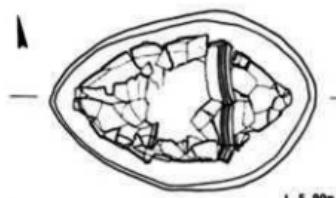
SJ12櫛棺墓 (PL. 7-1)

SJ11-13櫛棺墓に隣接する。墓壙は長さ2.08m、幅1.45m、深さ0.59mあり、西側をSD09溝に切られている。上甃は甃、下甃は甃を用い、上甃が下甃の中に入り込んだ形で検出されたが、もとは接口式櫛棺と考えられる。接口部には粘土目貼りを施し、ほぼ水平に埋置している。主軸方位N-W 60°。



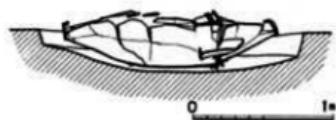
SJ13櫛棺墓 (PL. 7-1・2)

SJ12櫛棺墓の北側に位置する小児棺である。棺上部は削平を受け、上甃も口縁部を一部残すのみである。墓壙は長さ1.27m、幅0.6m、深さ0.1mで、上下とも甃を使用した接口式櫛棺をほぼ水平に埋置している。主軸方位S-E 69°。



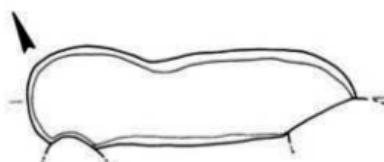
SJ15斎棺墓 (PL. 7-3)

調査区東端に位置する。墓横は平面梢円形で、長さ1.9m、幅1.27m、深さ0.29mある。上蓋は体、下蓋は腰の接口式斎棺をほぼ水平に埋置し、接口部には粘土目貼りをしている。主軸方位S-E79°。



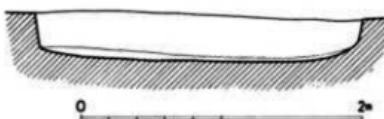
Tab. 1 久留間カミ塚遺跡斎棺墓一覧表

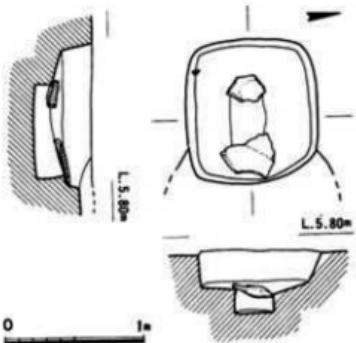
遺構番号	型式	器形 (上・下)	墓 横 (タテ×ヨコ×フカサ)	方位	傾斜	備考
S J 01	-	甕+甕	2.32×0.76×0.11	-	ほぼ水平	棺底わずかに残存
S J 02	小児	・甕	0.34×0.23×0.06	-	-	下蓋一部残存
S J 03	-	・甕	0.9×0.7×0.31	N-W7°	36°	上蓋削平
S J 04	石蓋單	・甕	1.15×0.87×0.53	N-W26°	38°	二次孔を穿ち挿入
S J 05	接口	鉢+甕	2.3×1.75×0.4	S-E72°	ほぼ水平	接口部粘土目貼り・S J 06より古い
S J 06	接口	鉢+甕	1.98×1.5×0.41	S-W87°	2°	M字形凸帯・接口部粘土目貼り
S J 07	接口	鉢+甕	2.51×1.46×0.45	S-E82°	ほぼ水平	接口部粘土目貼り
S J 08	接口 (小兒)	甕+甕	1.1×0.9×0.11	N-W13°	ほぼ水平	
S J 09	接口 (小兒)	甕+甕	1.35×0.7×0.33	S-E38°	5°	S D09に切られる
S J 10	小児	・甕	-	-	-	S D09に切られる
S J 11	接口	甕+甕	2.1×0.85×0.15	S-E60°	ほぼ水平	S D09に切られる
S J 12	接口	鉢+甕	2.08×1.45×0.59	N-W60°	3°	S D09に切られる・腰口部に粘土目貼り
S J 13	小児	甕+甕	1.27×0.6×0.1	S-E69°	ほぼ水平	上蓋わずかに残存
S J 14	-	・甕	×1.1×0.08	-	-	S D09-13に切られる
S J 15	接口	鉢+甕	1.9×1.27×0.29	S-E79°	2°	接口部に粘土目貼り



SP01土壙墓

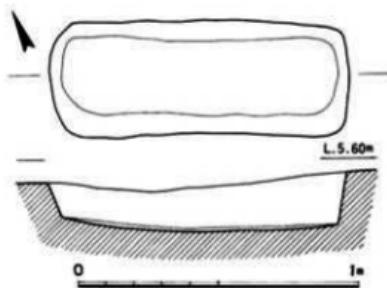
調査区中央部に位置する。墓横部分は削平を受け棺部のみ残る。棺は平面隅丸長方形で長さ2.3m、幅0.73m、深さ0.34mある。主軸方位S-E27°。





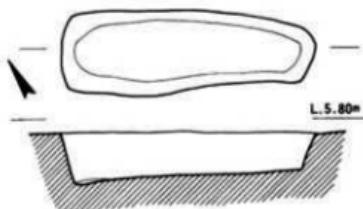
SP02土塙墓 (PL. 8-3)

調査区東側 S K04土塙の南に位置する小兒用石蓋土塙墓である。墓塙は平面方形で、長さ1.02m、幅0.94m、深さ0.3mあり、棺部は墓塙底や東側寄りに長さ0.65m、幅0.26m、深さ0.21mで掘り込んでいる。蓋は板石を2枚両小口上にかぶせ、中央に石ではなく板のようなもので蓋をしたと考えられる。主軸方位N-W75°。



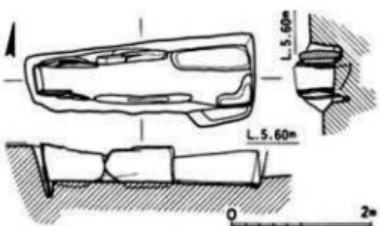
SP03土塙墓

S C01箱式石棺墓の南側に位置する。棺部は1.06m、幅0.4m、深さ0.19mある。主軸方位N-E 23°。



SP04土塙墓 (PL. 9-2)

S X01遺構の北側に位置する。棺部は長さ1.8m、幅0.6m、深さ0.38mある。主軸方位N-E 3°。横底中央東側壁寄りに、黒色土器の椀と杯が出土している。椀を杯にかぶせた状態で検出している。



SC01箱式石棺墓 (PL. 9-1)

調査区東端に位置し、棺東側は削平を受けている。長さ1.65m、幅0.52mの墓塙に、棺は板石を用いて造っている。西小口に1枚、南北両側壁に2枚ずつ残存する。棺は内法で長さ1.5m、幅0.27m、深さ0.26mある。主軸方位N-W83°。

(3) 祭祀遺構 (PL. 8-1・2)

祭祀遺構は2ヶ所検出している。SR01祭祀遺構は西側に、SR02遺構は東側の甕棺墓が集中する北に位置している。

SR01祭祀遺構は平面半月形で長さ3.5m、幅1.35mあって、深さ0.4mの大型土壙と長さ0.68m、幅 $0.5 + \alpha$ m、深さ0.2mの小型の土壙からなる。小型の土壙はSD04溝に切られている。大型土壙は壙底に若干の段がつき、西側で壙底より0.15m上に壺、無頭壺、高杯、甕が一括して出土している。小型土壙では壙底より0.1m上に大甕の胴部片と鉄錆が1点出土している。

SR02祭祀遺構は平面隅丸長方形で、長さ1.91m、幅1.33m、深さ0.27mある。遺構上部は削平を受け、浅い皿状になっている。土器は土壙の北寄りで、壙底より0.1m上で一括して出土している。筒形器台、高杯、壺、甕などがあり、筒形器台の脚下半部は立てられたままの形で検出された。

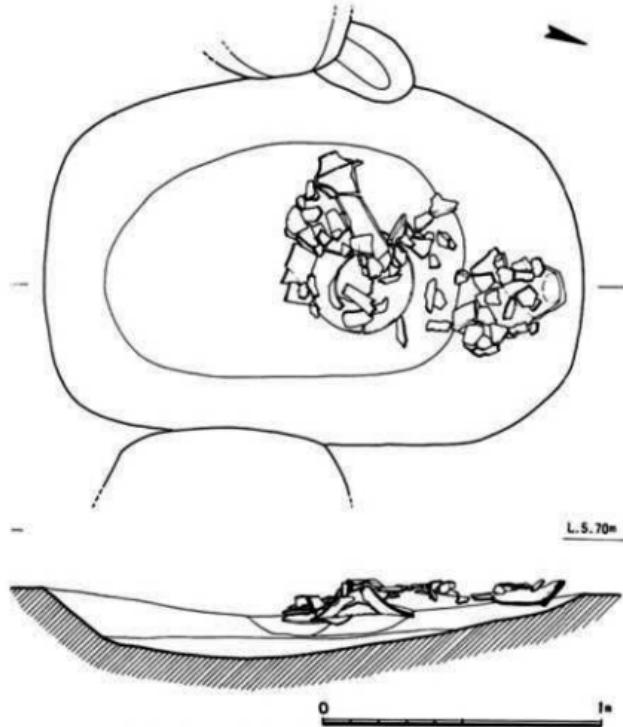


Fig. 4 久留間カミ塚遺跡SR02祭祀遺構実測図

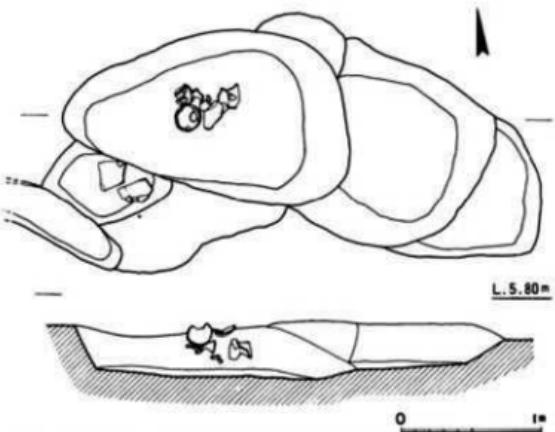


Fig. 5 久留間カミ塚遺跡SR01祭祀遺構実測図

(4) その他の遺構

弥生時代の埋葬跡の他に、土壙12基、溝12条、不明遺構1基、柱穴と考えられる小穴がある。土壙12基中6基が弥生時代に属するが、他の遺構については時期を決定する資料に乏しい。時期の明らかなものとしては平安時代前半に属する土壙3基、溝1条、鎌倉～室町時代にかかる溝3条がある。この他は形態、規模、切り合い関係などから平安時代前半以降のものと考えられる。

土壙は、弥生時代に属するものとしてSK01・05・09・10・11・12土壙の6基があげられる。SK01土壙は調査区西側に位置し、平面不整形で長さ2.7m、幅1m、深さ0.36mあり、中期の甕片が出土している。SK05・09土壙は調査区中央に位置する平面横円形の土壙である。SK05土壙は長さ2m、幅1m、深さ0.25m、SK09土壙は長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.3mあり、柱穴に切られている。SK05土壙から甕片、SK09土壙からは甕、壺片が出土している。SK10土壙は調査区中央南側に位置する。高杯、鉢、甕片が出土し、長さ0.9m、幅0.8m、深さ0.54mある。平面隅丸方形で、北側をSD09溝に切られる。SK11土壙は北側をSD09溝に切られ、南側は調査区外へ延びている。長さ0.8m以上、幅0.8m、深さ0.11mあり、広口壺の口縁部とその底部が出士している。SK12土壙はSD05溝に切られた平面横円形の土壙で、長さ2.8m、幅1.5m、深さ0.57mあり、甕、壺片が出土している。

弥生時代に属する以外では、SK02・04・06土壙から土師器碗、杯等が出土しており、平安時代前半のものと考えられる。SK02土壙は調査区西側に位置する平面円形の土壙で、径は1.1m、深さ0.9mである。黒色土器の碗が出土している。SK04土壙はSD08溝の南側に位置し、土師器の

椀、杯が出土している。径1.3mの平面円形の土壙で、深さは0.47mある。SK06土壙は平面隅丸長方形で、長さ2.6m、幅1.4m、深さ0.5mある。土師器杯が出土している。

SX01不明遺構はSR02祭祀遺構の北側に位置する。長さ3.2m、幅2.7+ α m、深さは0.1前後と浅いものである。弥生土器片や土師器片が混入している。

溝は12条ある。幅は0.5~1.2m、深さは0.74mが最も深く、他は0.3m前後である。弥生時代まで遡るものではなく、平安時代以降と考える。

SD02溝は調査区西側を東西に走る。幅1m、深さ0.58m、長さは10.8+ α mある。土師器杯と龍泉窯系の青磁が出土している。SD07溝は調査区中央に位置し、幅0.5m、深さ0.2m、長さは2.8mと短い。東西に走る溝で東側はSD06溝に接している。SD06溝との境付近から土師質土器の椀と甕が出土しており、中世のものであろう。SD08溝は調査区東側を東西に走るが、溝北側は調査区域外にかかり幅は不明である。長さ8.7m、幅は1.2+ α m、深さ0.74mあり、溝上層黒褐色土から多量の土師器片が出土した。土師器の椀、杯、皿、甕の他、黒色土器碗がある。平安時代前半と考えられる。SD09溝は調査区東側から中央部へ弧を描き、SJ09・10・11・12棟棺墓やSK10・11土壙を切っている。幅0.7m、深さ0.37m、長さ38+ α mあり、出土遺物は弥生土器、土師器杯、小皿、椀、黒色土器などが混入している。土師器杯、小皿は糸切り離して、鎌倉後半~室町時代に至るものである。SD12溝は調査区中央を東西に走り、長さは15.5m、幅0.6m、深さは0.1mと浅い。土師器の杯が出土し、室町時代と考えられる。

土壙、溝の他に、掘立柱建物跡の柱穴と思われる小穴を検出したが、建物を復元できるものはなかった。

Tab. 2 久留間カミ塚遺跡土壙一覧表

番号	平面	規模(縦×横×深)m	出土遺物	時期	備考
SK01	不整形	2.3×1×0.36	弥生(甕)	弥生・中	SD03に切られる。
SK02	円形	1.2×1×0.9	黒色土器(椀)、弥生(甕・鉢)	平安前半	
SK03	不整形	2.6×1.4×0.2			
SK04	円形	1.3×1.3×0.47	土師器(椀・杯)	平安前半	
SK05	楕円形	2.0×1×0.25	弥生(甕)	弥生・中	
SK06	隅丸長方形	2.6×1.6×0.5	土師器(杯)、弥生	平安前半	
SK07	楕円形	1.9×0.9×0.26			
SK08	不整形	1.5×1.1×0.41			一部袋状
SK09	楕円形	1.6×0.8×0.3	弥生(甕・鉢)	弥生・中	
SK10	隅丸方形	0.9×0.8×0.54	弥生(高杯・鉢・甕)	弥生・中	SD09に切られる。
SK11		0.8×0.8×0.11	弥生(甕)	弥生・中	SD09に切られる。
SK12	楕円形	2.8×1.5×0.57	弥生(甕・甕)	弥生・中	SD05に切られる。

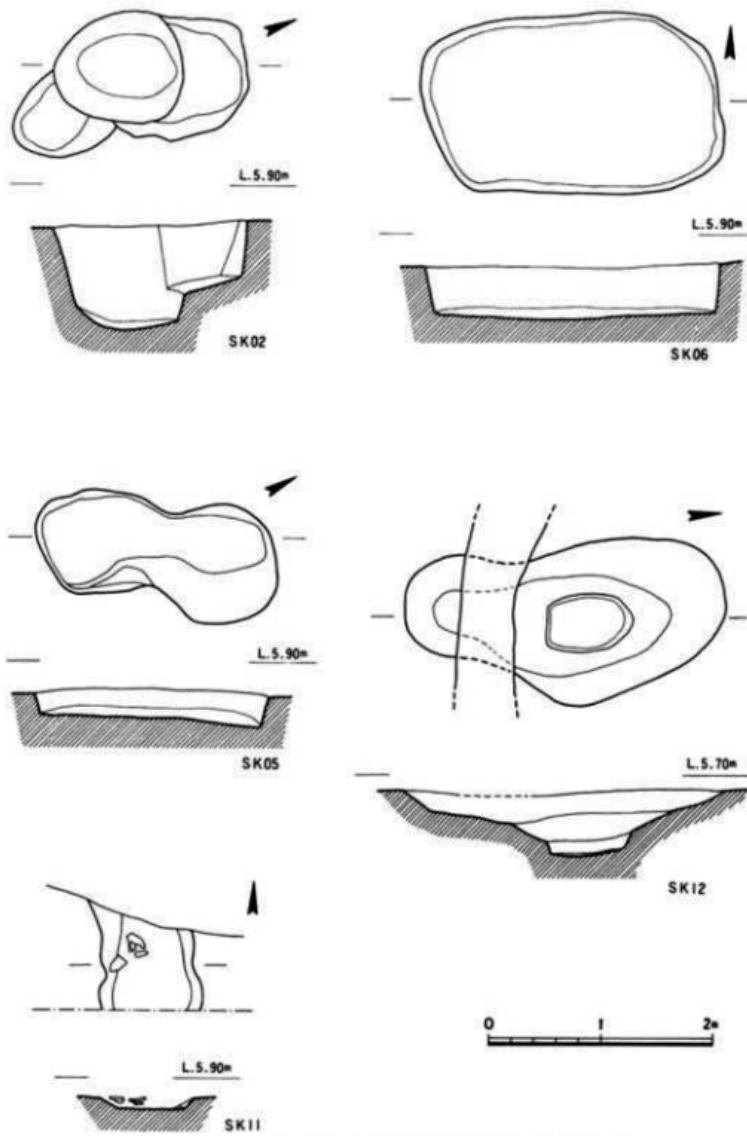


Fig. 6 久留間カミ塚遺跡 SK02-05-06-11-12土壤実測図

3. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器（甕、鉢、壺、高杯、筒形器台）、土師器（碗、杯）、磁器（碗）、それに鉄器である。しかし、各遺物の出土数はそれほど多くなく、時期的な変化もあまりみられない。前述の遺構と同様に、遺物が出土した各遺構の性格によってみると、それは、埋葬跡出土の弥生土器（甕棺）、祭祀遺構出土の弥生土器、その他の弥生土器、溝、土壤、土壤墓、その他出土の土師器、その他の遺物とする。

(2) 埋葬跡出土の弥生土器（甕棺）

久留間カミ塚遺跡の埋葬は甕棺墓、土壤墓、箱式石棺墓からなる。そのうち土器を用いた主なものは甕棺墓15基である。これら甕棺墓には、甕、鉢、壺を単独あるいは組み合せて使っている。形態的には次のように分類される。

甕	大型甕（成人用）	……大甕A・B・C・D
	小型甕（小児用）	……甕A
鉢	……	鉢A・B
壺	……	壺A

大甕A (Fig. 7-1・2, PL. 10-1・2) 器体は砲弾形である。体部上半部がわずかに内傾するものもあるが、ほぼ直立し、口縁部にT字形口縁がつく。T字形口縁は内外とも強く突出し、外側へ低く傾斜している。口縁部下に1~2条の断面三角形凸帯をめぐらすものもある。また体部中央下に断面三角形あるいは断面コ字形凸帯を2条めぐらす。底部は平底で、あまり厚みは大きくない。SJ05(下)、06(下)、07(下)、11(上、下)、12(下)、15(下)甕棺がある。

大甕B (Fig. 7-5) 器体は截頭卵形で、全体的に丸味をおびる。体部上半部は強く内傾し、口縁部に逆L字形に近いT字形口縁がつく。器体中央やや上に最大径をもち、そこに断面三角形凸帯を1条めぐらす。SJ09(下)甕棺1個だけである。

大甕C (Fig. 7-3・4, PL. 10-3・4) 器体は截頭卵形であるが、大甕Bほど丸味をもたない。最大径は体部上方にあり、口縁部に近くなるほど大きくなっていく。口縁部はL字形であり、口縁部下に断面三角形凸帯をもつ。また体部中央やや下に断面コ字形凸帯を1条めぐらす。底部は平底である。SJ03(上)、04甕棺がある。

大甕D (Fig. 7-6, PL. 10-6) 器体は砲弾形である。体部上半部はやや内傾する。体部中央には扁平な断面コ字形凸帯が1条めぐるが、ここで体部は屈曲する。底部は平底である。SJ03(下)甕棺がある。

甕A (Fig. 8-5~8) 器体はいちじく形である。体部上半部はわずかに内傾し、口縁部に逆L字形口縁または内側にやや突出するT字形口縁がつく。口縁部は水平か外側へやや低く

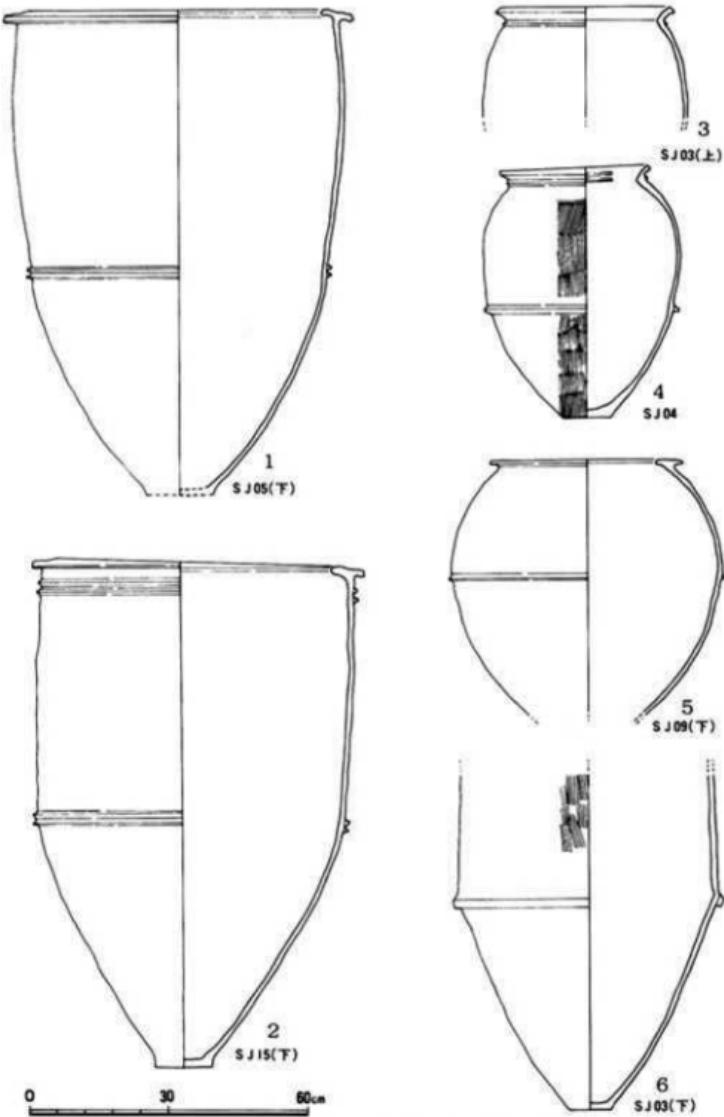


Fig. 7 久留間カミ塚遺跡出土瓦棺実測図(1)

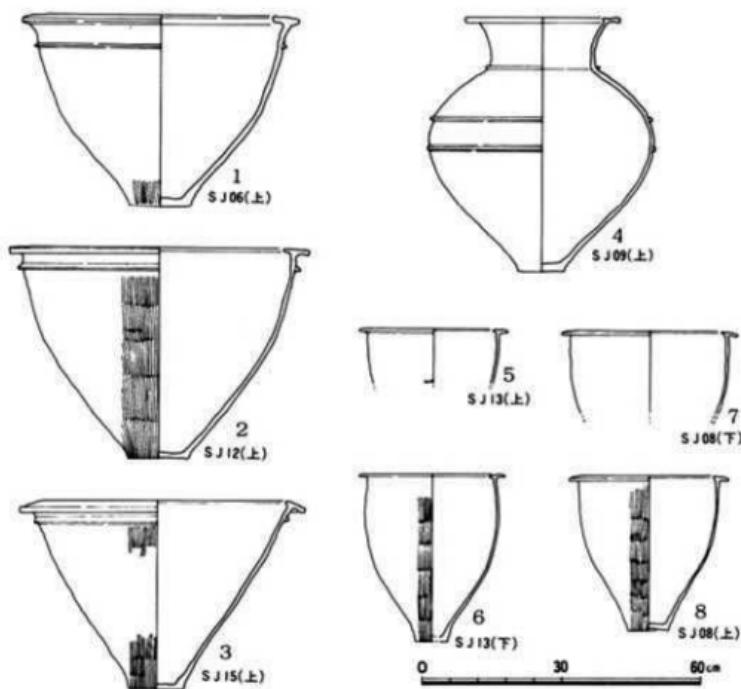


Fig. 8 久留間カミ塚遺跡出土壺棺実測図(2)

傾斜する。体部中央から底部にかけては急にすぼまり、不安定な感じがある。凸帯はない。器壁はうすい。SJ08(上、下)、13(上、下)壺棺がある。

鉢A (Fig. 8-1・2, PL. 11-1・3~5) 器体は内傾しながら楕円に開き、口縁部にT字形口縁がつく。口縁部は内外とも強く突出し、外側へやや低く傾斜する。口縁部下に断面三角形凸帯が1条めぐる。底部は平底またはやや上げ底気味である。SJ05(上)、06(上)、07(上)、12(上)壺棺がある。

鉢B (Fig. 8-3, PL. 11-2) 器体は鉢Aほど内傾せず、直線的に開く楕円である。口縁部はT字形口縁であるが、内側へはあまり突出せず、そして鉢Aより外側への傾斜が大きい。底部は平底である。SJ15(上)壺棺だけである。

壺A (Fig. 8-4, PL. 10-5) 器体は胴部中央で強く張り、肩部から頸部にかけて大きく内傾する。頸部から口縁部にかけては逆に大きく外反し、口縁部に逆L字形口縁がつく。

口縁部は内側にやや突出し水平である。胴部下半から底部にかけて大きくすぼまる。底部は平底である。頭部に断面三角形凸帯が1条、胴部に断面コ字形凸帯が2条めぐる。SJ09(上)壺棺がある。

(3) 祭祀遺構出土の弥生土器

久留間カミ塚遺跡の祭祀遺構は2基(SR01・02)ある。それらの遺構から、祭祀に用いられたと思われる土器が埋土のほか同じ層位から出土した。土器は、甕、壺、高杯、筒形器台、鉢であるが、一括としてとらえられよう。

SR01祭祀遺構出土の弥生土器

甕 (Fig. 10-7) 底部片しか出土していないが、SJ08-13壺棺墓の甕Aと同じ形態であろう。平底である。器体外面は縱方向のハケ目、内面はナデである。

壺 (Fig. 10-3・4, PL. 12-2・4) 4は胴部中央で強く張り、肩部から頭部にかけて大きく内傾する。頭部から口縁部にかけては逆に大きく外反する。器壁はやや厚い。器体外面の頭部は縱方向のヘラミガキ、体部は横方向のヘラミガキ、また内面の口縁部はヨコナデ、他はナデ。3は無頸の壺で、全体的に丸みをもち、最大径が胴部中央にある。胴部中央から口縁部にかけては次第に内傾し、口縁端部は上外方に少し突出する。底部にかけては胴上半部の曲線よりやや直線的であり、器壁の厚みも段々とぶ厚くなる。底部はやや上げ底ぎみの平底である。胴部に断面三角形凸帯が3条めぐる。器体外面の口縁部はヨコナデ、他は斜め方向のハケ目、また内面の胴部上半はヘラ状のナデ、下半はそのナデのあと指ナデ。

高杯 (Fig. 9-1・6, PL. 12-6) 1は楕円形の杯部に、下外方に大きく外反する脚部がつく。杯部はやや内傾し、口縁端部でおさまる。脚部は杯部より厚みがあるが、脚端部は杯部と同じく、そのままおさまる。杯部中央に断面三角形凸帯が1条めぐる。器体外面の杯口縁部はヨコナデ、その他の杯部はハケ目、脚部上半はヘラミガキ、脚端部はヨコナデ、また内面の、杯部はナデ、脚部はシボリ。6は脚部だけ残存する。脚部は1よりも長く、脚の開きはゆるやかである。器体外面は縱方向のヘラミガキ、また内面の脚部上半は指ナデ、下半は横方向のハケ目、脚部はヨコナデ。

SR02祭祀遺構出土の弥生土器

甕 (Fig. 10-6) SR01祭祀遺構出土の甕と同形で、底部片しか残っていない。器体外面は縱方向のヘラミガキ、内面はナデ。

壺 (Fig. 10-1, PL. 12-3) 接合できないが同一個体と思われる。頭部は上外方へしだいに大きく開き外反する。胴部は中央やや上で強く張り、そこに断面M字形凸帯を1条めぐらす。そして、頭部にかけては大きく内傾するが、底部にかけては直線的に厚みも増してのびる。底部は上げ底である。器体外面は全面丹塗りで、頭部はそのあと縱方向の暗文を入れているが体部は横方向のヘラミガキである。また内面は頭部上半まで丹塗りであるが、他はナデ。

高杯 (Fig. 9-3) 脚部片しか出土していない。SR01祭祀遺構の高杯の6と同形、同調整である。

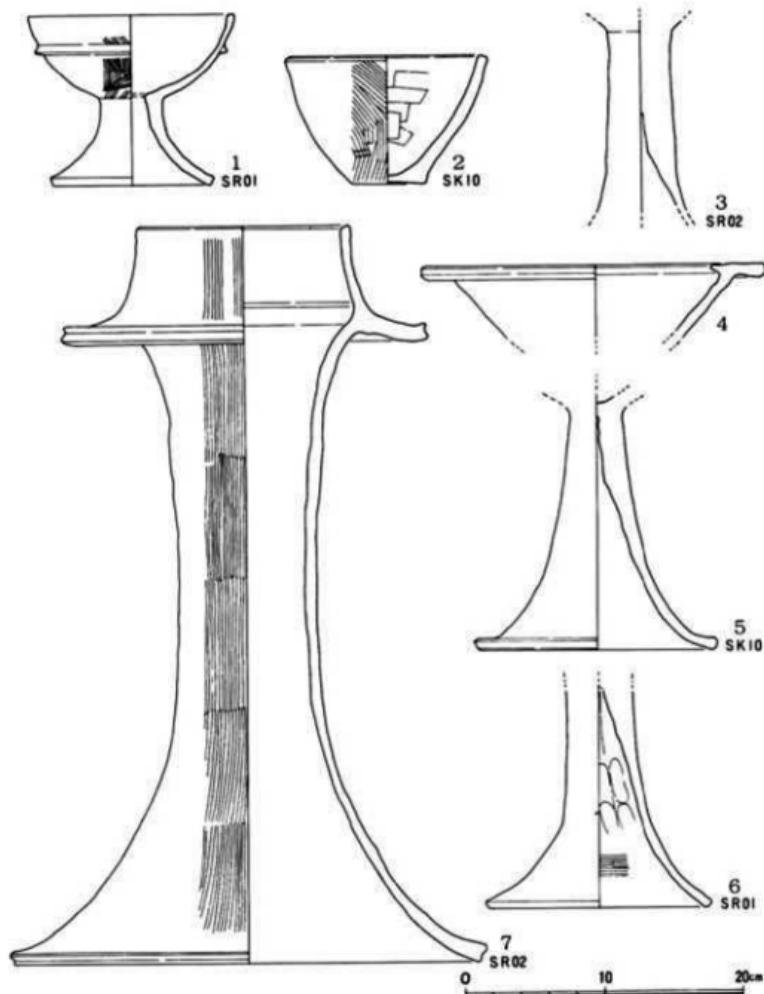


Fig. 9 久留間カミ塚遺跡出土弥生土器実測図(1)

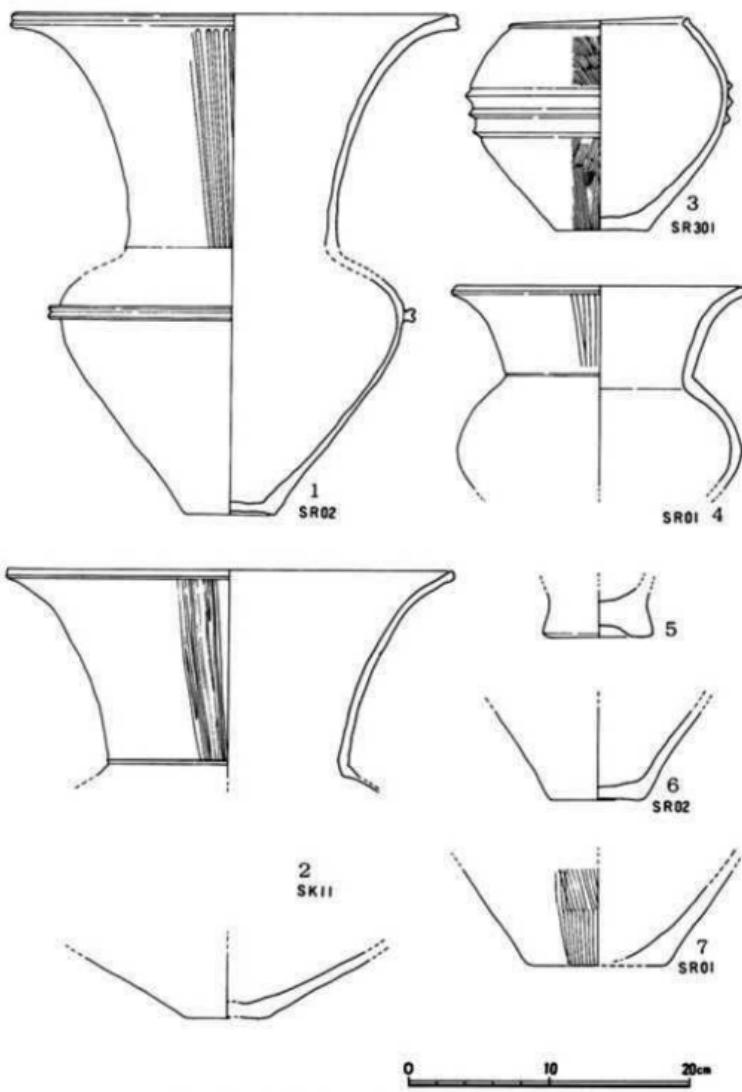


Fig. 10 久留間カミ塚遺跡出土弥生土器実測図(2)

筒形器台 (Fig. 9-7, PL. 12-1) 堀の大きく開いたラッパ状の器体で、口縁下に幅広い堀のつくる器形である。体部中央はほぼ直立しているが、脚部へのびるにつれて、下外方へ大きく外反し、器高に対して安定感がある。体部中央から脚部へは、上外方へ少しだけ外反しないが、脚部は外側へ強く突出する。口縁部は脚部からゆるやかに内傾し、口縁端部はそのままおさまる。器体外面は、口縁端部、脚部、脚部がヨコナデで、他は縦方向、斜め方向のハケ目である。全面丹塗りである。また内面は口縁部がヨコナデで、他はナデ。口縁部のみ丹塗りである。

(4) その他の弥生土器

久留間カミ塚遺跡からはその他に、土壙と包含層から少量の弥生土器が出土している。

壺 (Fig. 10-5) 包含層から底部片が出土。厚い上げ底である。器体はナデ。

壺 (Fig. 10-2) SK11土壙から出土しているが、胴部を欠く。SR02祭祀遺構の壺と似る。頭部は上外方へしだいに大きく開き外反する。底部から胴部にかけては、上外方へゆるやかに直線的にのびる。胴部の広がりに対して底部はせまく、やや不安定である。器体外面の頭部は縦方向の暗文、口縁部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ、また内面の頭部はヘラミガキ、胴部はナデ。

高杯 (Fig. 9-4・5, PL. 12-7) 4は包含層から出土しているが、杯部片である。体部は上外方へ直線的にのび、口縁部に平坦な口縁がつく。口縁部はヨコナデ、他はナデ。

5はSK10土壙から出土しているが、脚部片である。SR01祭祀遺構の高杯の6と同形である。脚は長く、下外方へゆるやかに外反する。器体外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで、脚端部のみヨコナデ。

鉢 (Fig. 9-2, PL. 12-5) SK10土壙から出土している。体部は上外方へゆるやかに内傾しながらのび、口縁部はそのままおさまる。底部はやや上げ底である。体部はぶ厚いが、底部はうすい。器体外面はハケ目、内面はヘラ状のナデの後指ナデで、口縁部のみヨコナデである。

(5) 溝、土壙、土壙墓、その他出土の土器

溝12条、土壙6基、土壙墓1基で遺構としては少なくないが、それらに伴う遺物としては量的にもわずかなうえ、小破片が大部分のため、実測可能なものが少ない。このため、各遺構の築造時期を決める要因に欠けるものが多い。特に土壙、土壙墓については遺物が少ない。

溝出土の土器

杯 (Fig. 11-9~14・16・17, PL. 13-1・2・4) 9はSD08溝から出土。平底の底部に、やや内凹する体部がつく。器体外面の底部はヘラ切り離し後ナデ、体部はヨコナデ。また内面の底部はナデ、体部はヨコナデ。10はSD08溝から出土。やや上げ底ぎみの底部に、上外方に内凹しながらのびる体部がつく。体部上半は欠く。器体外面の底部はヘラ切り離し後

ナデ、体部はヨコナデ。内面の底部はナデ、体部はヨコナデ。11と12はSD11溝から出土。9よりも体部が長くのび、そして外反する。器体外面の底部はヘラ切り離し後板目、体部はヨコナデ。また内面の底部はナデ、体部はヨコナデ。13はSD01溝から出土。上げ底の底部に、内湾する体部がつく。底部が杯部より厚い。器体外面の底部は糸切り離し、体部はヨコナデ。また内面の底部はナデ、体部はヨコナデ。14はSD09溝から出土。底部は上げ底で、13と同じであるが底部の径が大きく、安定感がある。器面調整は13と同じ。16はSD08溝から出土。平底で径の大きな底部に、やや内湾する体部が、短くつく。器高も低い。器体外面の底部は不明瞭だが、他はヨコナデ。17はSD07溝から出土。平底の底部に、やや外反する体部がほぼ直立してつく。口縁端部は平坦である。底部はうすく、体部が厚い。また土師質ではあるが、焼きがよく固い。器体外面の底部は板目、体部はナデ。また内面はハケ目。

橈 (Fig. 11-2~5-7) 2はSD08溝出土。短く外反する高台部に、上外方へ内湾しながらのびる体部がつく。杯部底部の内外面がナデ、他はヨコナデ。3はSD08溝出土。杯部底部の外側寄りに、直線的に聞く高台部がつく。体部は上外方へ内湾しながらのびるが、直線的で内傾度が強く、直立ぎみ。4はSD08溝出土。杯部の底部と体部の境は角ばる。体部は上外方へ外反しながらのびる。高台部は体部との境につく。5はSD08溝出土。杯部の底部から体部にかけては丸みをもつ。高台部は杯部底部のやや内側寄りに、下外方へ内湾しながら長くつく。体部は上外方へ大きく湾曲しながらのびる。器体外面の底部はナデ、他はヨコナデ。また内面は黒塗りの後ミガキ。7はSD08溝出土。高台部は、下外方へいったん屈曲してのびる。径が大きい。器体外面はヨコナデ。

鑿 (Fig. 11-20) SD08溝から出土。上外方へゆるやかに外反する口縁部に、直線的にのびる体部がつく。器体外面の体部はハケ目、口縁部はヨコナデ。内面の体部はヘラケズリ、上半の一部にハケ目。口縁部はヨコナデ。

高杯 (Fig. 11-19) SD08溝から出土。下外方にゆるやかに聞く脚部片である。

盞 SD08溝から出土。破片で口径不明。器高は低く口縁部は丸くおさまる。器体はヨコナデ。

土壤・土壌墓・その他出土の土器

杯 (Fig. 11-8~15, PL. 13-3) 8は包含層から出土。SD08溝出土の杯9よりも底径が小さいが、形は似る。底部が厚い。器面調整も9に同じ。15はSP04土壤墓から出土。橈の1(Fig. 11)と共伴関係にある。SD08溝出土の杯16と同様で、底径に比べ器高がかなり低い。やや上げ底の底部に、内湾する体部が短くつく。器体外面の底部はナデ、体部はヨコナデ。また内面の底部はナデ、体部はヨコナデ。

橈 (Fig. 11-1~6, PL. 13-5) 1はSP04土壤墓から出土。杯の15 (Fig. 11)と共伴関係にある。短く下外方へ聞く高台部に、上外方へ内湾しながらのびる体部がつく。口縁部で

さらに少し開く。高台部は杯部底部のやや内側寄りにある。器体外面の底部から体部下半はヨコナデ、体部上半はミガキ。また内面は黒塗り後ミガキ。器体外面にヘラ記号らしき線引きがある。6はSK04土壤から出土。杯部の底部から体部にかけては丸みをもつ。高台部は下外方に内湾しながら長くつく。体部は上外方へ大きく湾曲しながらのびる。器体外面の底部はヘラ切り離し、他はヨコナデ。また内面の底部はナデ、他はヨコナデ。

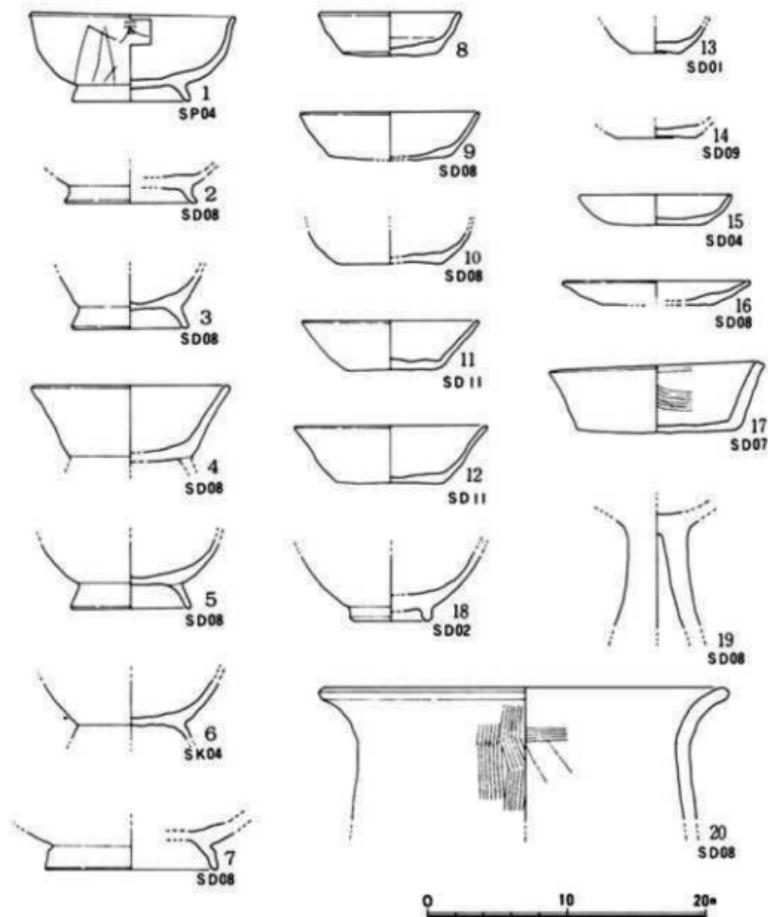


Fig. 11 久留間カミ塚遺跡出土土師器・青磁実測図

(6) その他の遺物

その他の遺物としてここにあげ得べきものはわずか2点にすぎない。

青磁 (Fig. 11-18) SD02溝から碗がわずかに1点出土している。杯部底部の内側寄りに短く直立する高台部がつく。杯部は底部から上外方へゆるやかに湾曲し、のびる。底部は厚い。器体外面の底部の中央付近を除いて、全面に緑色の釉がかかる。

鉄鎌 (Fig. 12, PL. 13-6) SR01祭祀遺構から1点だけ出土。両丸造で厚みが0.2cmある。鍔身の長さは4.5cm、最大幅は1.9cmである。

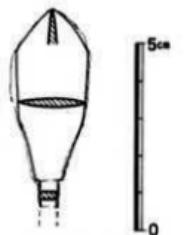


Fig. 12 久留間カミ塚遺跡
SR01祭祀遺構出土鉄鎌実測図

Tab. 3 久留間カミ塚遺跡出土焼物一覧表

号数	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	口縁部実測図 (%)	
					(口)口縁部(器)器体(凸)凸帯(底)底部	(口)口縁部(器)器体(凸)凸帯(底)底部
S J 0 3	(1) 瓶	口径 37.9 口内径 30.9	(口) く字形 (器) 截頭卵形	口縁部 外 面 内 面 胎 土	ヨコナデ 斜め方向のハケ目のあとナデ ナデ 褐色、細砂粒を多く含む	
	(2) 瓶	胴 径 55.2 底 径 9.0	(器) 瓶形 (凸) 脊部に扁平な台形状のもの1条 (底) 平底	凸帯部 外 面 内 面 胎 土	ヨコナデ 刷下半部は縱方向のハケ目、一部ナデ、刷下半部は縱方向のハケ目のあとナデ ナデ 褐色、細砂粒を多く含む	
S J 0 4	甕	器 高 54.4 口径 32.1 口内径 22.5 胴 径 42.2 底 径 10.4	(口) く字形 (器) 截頭卵形 (凸) 口縁下に断面三角形1条、胴部に台形1条 (底) 平底	口縁部 凸帯部 外 面 内 面 胎 土	ヨコナデ ヨコナデ 肩部はハケ目のあとヨコナデ、胴部はハケ目のあとヨコナデ ナデ 淡黄褐色、砂粒を多く含む	
	(1) 大甕	器 高 104.2 口径 75.5 口内径 61.6 胴 径 71.6 底 径 14.3	(口) 内側に強く突出するT字形 (器) 楠形 (凸) 口縁下に断面三角形2条 (底) 平底	口縁部 凸帯部 外 面 内 面 胎 土	ヨコナデ ヨコナデ ナデ ナデ 淡黄褐色、砂粒を多く含む	

号数	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	口縁部実測図 (%)
S J 0 6	(1) 大甕	器 高 41.2 口外径 59.0 口内径 47.4 底 径 13.1	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 梨形 (凸) 口縁下に断面三角形 1条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ハケ目あとナデ、 底部付近は輻方向の ハケ目 内 面 ナデ 胎 土 黄褐色、細砂粒を含む	
		器 高 103.5 口外径 78.6 口内径 63.2 底 径 12.0	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 球弾形 (凸) 脚部に断面三角形2 条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 黄褐色、細砂粒を含む	
		器 高 45.4 口外径 73.8 口内径 60.8 底 径 12.3	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 梨形 (凸) 口縁下に断面三角形 1条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 淡黄褐色、細砂粒を 含む	
		口外径 72.0 口内径 57.6 脚 径 60.0	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 球弾形 (凸) 脚部に断面三角形2 条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 黄褐色、細砂粒を多 く含む	
		器 高 33.0 口外径 34.4 口内径 28.0 底 径 8.8	(口) 逆T字形 (器) いちじく形 (凸) なし (底) あげ底	口縁部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 淡黄褐色、細砂粒を 多く含む	
		口外径 38.8 口内径 30.0	(口) T字形 (器) いちじく形 (凸) なし	口縁部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 淡黄褐色、細砂粒を 多く含む	
S J 0 9	(2) 甕	器 高 54.6 口外径 33.2 口内径 25.6 脚 径 49.0 底 径 10.0	(口) 逆T字形 (器) 脚部が大きく張る 梨形 (凸) 脚部に断面三角形1 条、脚部に台形2条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 脚上半部はヨコナデ 脚下半部はナデ 内 面 脚部までヨコナデ、 他はナデ 胎 土 淡褐灰色	
		口外径 41.0 口内径 29.6 脚 径 58.8	(口) T字形 (器) 截頭形 (凸) 脚部に断面三角形1 条	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 不明 内 面 ナデ 胎 土 淡黄褐色、細砂粒を 多く含む	
S J 1 1	(1) 大甕	口外径 79.3 口内径 66.2 脚 径 80.8	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 球弾形 (凸) 口縁下に断面三角形 2条、脚部に断面三 角形2条	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 淡褐色、大粒の砂粒 を多く含む	
		口外径 73.8 口内径 60.0 脚 径 75.4	(口) 内側に強く突出する T字形 (器) 球弾形 (凸) 口縁下に断面三角形 2条、脚部に断面三 角形2条	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデ 内 面 ナデ 胎 土 淡褐色、細砂粒を 多く含む	

号数	器種	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	口縁部実測図 (%)	
S J 1 2	大甕	器 高 45.4 口外径 64.0 口内径 52.8 底 径 12.9 器 高 109.2 口外径 73.2 口内径 59.9 胸 径 61.2 底 径 13.7	(1) T字形 (器) 梨形 (凸) 口縁下に断面三角形 1条 (底) 平底 (1) T字形 (器) 瓶頸形 (凸) 口縁下に断面三角形 1条、胴部に台形2 条	口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎	ヨコナデ ヨコナデ 板方向のハケ目 ナデ 淡褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ ヨコナデ ナデ ナデ 淡褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ 板方向のハケ目 ナデ 淡黄褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ 口縁下はナデ、他は板方向のハケ目 ナデ 淡褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ ヨコナデ 板方向のハケ目 ナデ 淡黄褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ ヨコナデ ナデ ナデ 淡黄褐色、細砂粒を多く含む	  
S J 1 3	甕	口外径 31.9 口内径 25.4 器 高 36.0 口外径 31.1 口内径 24.6 底 径 7.0	(1) T字形 (器) いちじく形 (凸) なし (口) T字形 (器) いちじく形 (凸) なし (底) 平底	口縁部 内外面 胎 口縁部 内外面 胎 口縁部 内外面 胎	ヨコナデ 板方向のハケ目 ナデ 淡黄褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ 口縁下はナデ、他は板方向のハケ目 ナデ 淡褐色、細砂粒を多く含む	 
S J 1 5	大甕	器 高 40.4 口外径 60.8 口内径 52.2 底 径 11.7 器 高 109.4 口外径 71.6 口内径 57.3 胸 径 68.2 底 径 12.4	(1) T字形 (器) 梨形 (凸) 口縁下に断面三角形 1条 (底) 平底 (1) 内側に強く突出する T字形 (器) 瓶頸形 (凸) 口縁下に断面三角形 2条、胴部に断面三 角形2条	口縁部 凸帯部 内外面 胎 口縁部 凸帯部 内外面 胎	ヨコナデ ヨコナデ 板方向のハケ目 ナデ 淡黄褐色、細砂粒を多く含む ヨコナデ ヨコナデ ナデ ナデ 淡黄褐色、細砂粒を含む	



1



2

3

1. SD07 潜出土師器(Fig.11-17)底部内面
2. SD07 潜出土師器(Fig.11-17)底部外面
3. SP84 土堆出土土師器(Fig.11-1)外面ヘラ記号

Fig. 13 久留間カミ塚遺跡出土土師器拓影

III. ま と め

七田忠志、松尾植作両先生を中心に行われた久留間遺跡の発掘調査から、すでに30数年も経過してしまった。文化財保護思想が一般に貧弱だった当時としては、わずか十数m²の調査面積でも大変だったにちがいない。しかし、その調査結果は周辺地域を調査せねばならなかった我々にとって、大変参考になるものであった。以下、概要を示す。

久留間遺跡では、「住居跡」、「泉及び洗い場」を確認している。「泉及び洗い場」の遺構は、湧水地点を中心に葺などを敷きつめた洗い場ということである。「住居跡」等は調査面積が少なかったため、全容をうかがうことはできないが、数基まとまっていたらしい。また出土した遺物は、石鏡・石庖丁・凹石磨石・石帯・植物種実、それに土器である。ただこれらは遺構からではなく、堆積土層からしか出土していないので、遺構の年代を把握するには不十分である。土器は弥生時代後期のものが大部分で、他に中期と奈良時代のものが少量である。そこで調査者のこの遺跡に対する所見をみると、次の2点に注目している。

ひとつは出土した遺物から、弥生時代と奈良時代の間に空白があること。

ひとつは石器が少なく土器が余りに多いこと。しかし、須恵器はごくまれなこと。

さて、これらのことから久留間遺跡の北方100mほどしか離れていない久留間カミ塚遺跡についても同様の状況が考えられたが、前調査よりも広範な区域の発掘を行いたため、より広い所見を得ることができた。まず遺構についてであるが、弥生時代の埋葬や祭祀の遺構と平安時代の埋葬の遺構が主であり、一帯はこれらの時期には住居域ではなかった点があげられる。ただ、それらの遺構が東西へ延びていないこと、また南北への広がりもさほどないことから、墓域（特に弥生時代）としても広くはないようである。このように低地で湧水の多い久留間地域では、これら住居跡や墓跡の様子から、集落は地形的に限られた狭い微高地を中心に点在していること、従って墓域もその集落の規模と地形的条件により小規模にしか点在していないかたるものと考えられる。

また遺物についてであるが、一時期（特に弥生時代）に集中すること、空白の時期があることでは先の調査内容と同様である。ただ弥生時代のものはやや逆上って中期中頃に集中している。その中で注目されるのは、筒形器台である。県内では現在までに19ヶ所でしか確認されていない。そして、この器台については今までの調査から、佐賀・福岡など北部九州でしか発見されていないこと、弥生時代中期中頃から後葉にかけての一時期にしか見られないことがいわれている。^{註7} しかし、このような大型の器台がどのようなことから作られたのか、また祭祀遺構だけでなく住居跡などからも出土していることから、どのように使用されたのかなど、まだ不明の点が多い。ここでは調査の結果、甕棺墓などの埋葬区域において、ほぼ同じ時期に、祭祀を目的として使われたような状況がみられたことをあげておきたい。

註7. 註1に同。 註8. 岩永政博「利田柳遺跡田区」 神埼町文化財調査報告書 1980 神埼町教育委員会

池上遺跡

Ⅳ 池上遺跡 (略号: IUN)

1. はじめに

池上（池上三本松）遺跡は、佐賀県佐賀郡大和町大字池上字三本松の畠地に所在する。

池上遺跡は、佐賀平野西部、脊振山地から南へ派出した嘉瀬川西岸の低位段丘上に位置し、弥生時代から中世にかけての遺物が濃密に散布している。標高7m前後、水田面との比高は1m程度である。この遺跡に対してこれまで発掘調査が行われたことはなく、組合式石棺、甕棺の存在が散発的に知られていたにすぎない。また当該地は、山麓部からはなれた低位段丘上の古墳群として知られる。すなわち、北50mに四天王社古墳（円墳）、南200mに道善寺古墳（前方後円墳）、南東250mに風来寺古墳（前方後円墳）がある。この他、周辺の遺跡については本文II-1の「遺跡の概要」の中に詳しいので参照願いたい。

2. 調査の経過

遺跡の発見は、昭和55（1980）年2月初旬、県道松尾・佐賀停車場線に町道が付設されたことになったため、県道の一部拡幅が行なわれた際、数基の甕棺墓（弥生時代前期末～中期前葉）が破壊されたことによる。その際、年度内に町道の工事も予定されている旨の説明があつたため、佐賀県道路課・文化課、大和町建設課・教育委員会の間で遺跡の保存について協議を行った結果、発掘調査を実施することとなった。調査は佐賀県文化課が担当し、同年3月15日から3月31日まで実施した。

調査は、1m前後の耕土・包含層をユンボで取り除き、耕土はトラックで調査区外に搬出した。遺構検出面は黄褐色ローム質土である。調査は工事と並行して実施したため、十分意を尽くすことができなかつた面も多く、遺漏の多い報告となつたことをおわびしたい。

3. 遺構

甕棺墓 9基検出した。調査区の南半分に集中しており、工事中発見の甕棺墓から考えると現在の県道から南側へ墓域は広がっており相当数の甕棺墓の存在が予想される。主軸はほぼ東西方向であり、S J 02だけが南北方向をとる。墓壙は削平されており、甕棺自体が半碎された状態である。甕棺はS J 03・05が挿入式で、他は全て接口式である。挿入式の場合上甕の口縁部外側を全て打ち欠いている。目張り粘土はS J 01以外確認することができなかつた。

(Tab. 4, Fig. 15-16)

土壙 10基検出した。平面不整形のものが多い。遺物はほとんど出土していないが、おそらく

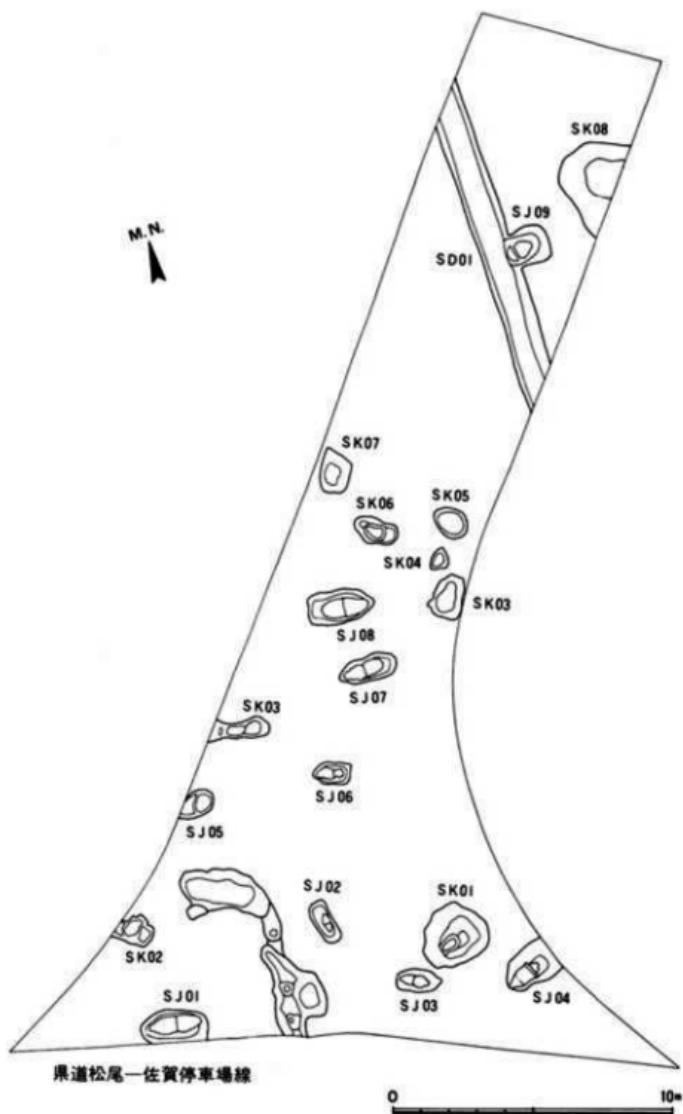


Fig. 14 池上遺跡遺構配置図

弥生時代のものと考えられる。

溝 調査区の北部に1条検出した。幅1.3m、深さ0.6~0.65mを測る。主軸はN-W 3°、S J 09を切っている。弥生時代と考えられる。

4. 遺物

豪棺以外の遺物は、包含層から須恵器・土師器の破片が少量出土したにとどまる。豪棺についてはTab.5を参照願いたいが、いずれも、森の汲田式、高島のV式に相当し、中期前半に位置づけることができる。(Fig.17)

5. 資料の保管

出土遺物・遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・トレス図等については佐賀県文化財資料室(佐賀市水ヶ江一丁目1番12号、佐賀県庁東別館内、電話0952(23)4537)で保管・管理している。このための資料として遺物実測図(遺物登録番号とは別)・遺構写真・遺物写真的登録番号を記して検索の便としたい。なお、遺物実測図(豪棺)については特に縮図したものと、写真についてはベタ焼きにしたものをカード化している。

(1) 遺物実測図登録番号

003031~003038

(2) 遺構写真登録番号

(4×5) 800796~800841

(35mm) 800065・800072・800073・800105

(3) 遺物写真登録番号

(4×5)

Tab. 4 池上遺跡豪棺墓一覧表

(単位:m)

番号	豪棺形式	器 形		土 壤			方 位	傾 斜	備 考
		上	下	長	幅	深			
S J 01	接口式	豪	豪	2.55	1.15	0.46	N-W 3°	7°	粘土目張り。
S J 02	接口式	豪	豪	1.43	0.69	0.21	N-W 6°	7°	小兒
S J 03	挿入式	豪	豪	1.55	0.88	0.26	N-W 65°	1°	小兒、上豪口縁部外側打ち欠き。
S J 04	接口式	鉢	豪	(1.80+α)	1.38	0.70	S-W 64°	8°	豪棺と棺底との間に黄色粘土を敷く。上部に守形。
S J 05	挿入式	豪	豪	(1.00+α)	0.92	0.23	S-W 88°	55°	上豪口縁部外側打ち欠き。
S J 06	接口式	豪	豪	1.37	0.81	0.22	N-W 79°	11°	
S J 07	接口式	豪	豪	2.10	0.96	0.28	S-W 84°	4°(推)	
S J 08	接口式	豪	豪	2.47	1.20	0.40	N-W 88°	2°	
S J 09	接口式(?)	豪	豪	(1.66+α)	1.42	0.45	N-E 73°	6°	S D02に切られる。

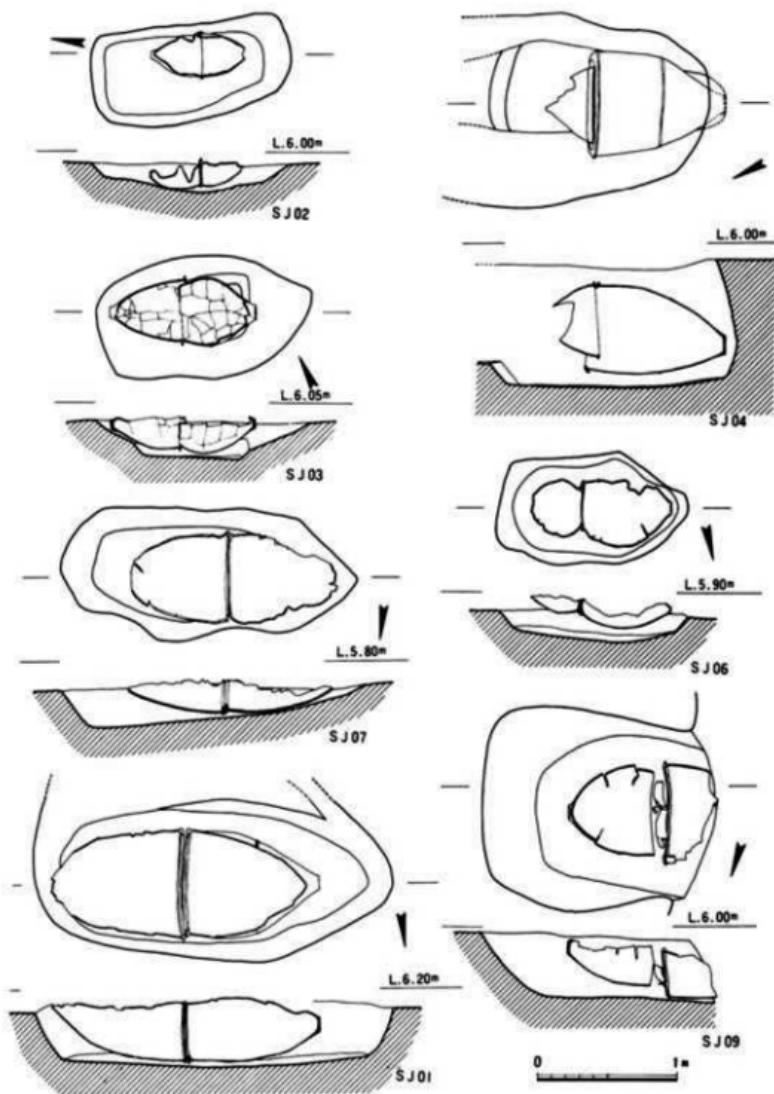


Fig. 15 池上遺跡龜殼基部測圖(1) (1/40)

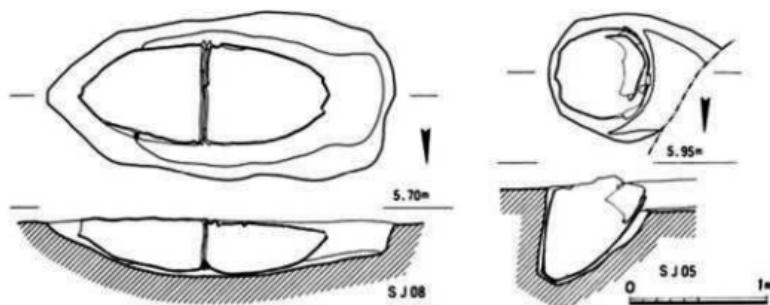


Fig. 16 池上遺跡出土壺基実測図(2) (1/40)

Tab. 5 池上遺跡出土壺基一覧表 (単位: cm. (口)=口縁部・(器)=器形・(凸)=凸帯・(底)=底部)

番号	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴	口縁部実測図(右)
S J 0 1	(日) 甕	器 高 94.6mm 口外径 74.4 口内径 65.0 胴 径 70.8 底 径 —	(口) T字形 (器) 磐弾形 (凸) 脇部に断面三角形2条 (底) —	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を多く含む	
	(?) 甕	器 高 94.6 口外径 71.0 口内径 58.4 胴 径 70.4 底 径 11.9	(口) 内側へ強く突出するT字形 (器) 磐弾形 (凸) 脇部に断面三角形2条 (底) 平底 側外面に3条の沈線を持つ、基体のひずみ丸。	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を多く含む	
S J 0 2	(日) 甕	器 高 42.3 口外径 33.300 口内径 27.000 胴 径 30.0 底 径 5.5	(口) L字形 (器) 磐弾形 (凸) — (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 外 面 ハケメ 内 面 ナデ	
	(?) 甕	器 高 54.0 口外径 — 口内径 24.300 胴 径 45.2 底 径 8.9	(口) 内側へ強く突出するT字形 (器) いちじく形 (凸) 脇部に断面三角形1条 (底) 平底 口縁部外側を打ち欠く。	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を含む	
S J 0 3	(日) 甕	器 高 52.6 口外径 46.400 口内径 38.800 胴 径 43.4 底 径 8.6	(口) L字形 (器) 磐弾形 (凸) 脇部に断面三角形1条 (底) わずかに上げ底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ハケメ(板方向) 内 面 ナデ 胎 土 砂粒を多く含む	

番号	器種	法量	形態の特徴	技術の特徴	口縁部実測図(%)
S J 0 4	(日) 鉢	器高 36.6 口外径 54.0 口内径 45.0 胴径 — 底径 12.5	(口) T字形 (器) 箕形 (凸) 脊部に断面三角形1条 (底) わざかに上げ底 側中位に外縁からの穿孔あり。	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を多く含む 雲母あり。	
	(日) 鉢	器高 99.4 口外径 72.6 口内径 58.7 胴径 69.5 底径 12.9	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) 脊部に断面三角形2条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を含む。	
S J 0 5	(日) 鉢	器高 — 口外径 — 口内径 — 胴径 — 底径 —	(口) T字形 (器) — (凸) — (底) — 口縁部外側を打ち欠く	口縁部 ヨコナデ(内側) 凸帯部 — 外 面 — 内 面 — 胎 土 砂粒を多く含む	
	(日) 鉢	器高 — 口外径 — 口内径 — 胴径 — 底径 12.8	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) 脊部に断面三角形2条 (底) 平底	口縁部 ヨコナデ(舟型の痕跡あり) 凸帯部 ヨコナデ(痕跡あり) 外 面 風化して不明 内 面 — 胎 土 砂粒を多く含む。	
S J 0 7	(日) 鉢	器高 — 口外径 — 口内径 — 胴径 — 底径 —	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) — (底) —	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 — 外 面 — 内 面 — 胎 土 砂粒を多く含む	
	(日) 鉢	器高 — 口外径 — 口内径 — 胴径 — 底径 —	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) — (底) —	口縁部 ヨコナデ(舟型の痕跡あり) 凸帯部 — 外 面 — 内 面 — 胎 土 砂粒を多く含む	
S J 0 8	(日) 鉢	器高(87.4+α) 口外径 68.8 口内径 57.4 胴径 64.0 底径 —	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) 脊部に断面三角形2条 (底) —	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を含む	
	(日) 鉢	器高(85.5+α) 口外径 51.6 口内径 51.6 胴径 64.8 底径 —	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) 脊部に断面三角形2条 (底) — 器体のひずみ大	口縁部 ヨコナデ 凸帯部 ヨコナデ 外 面 ナデツケ 内 面 ナデツケ 胎 土 砂粒を多く含む	
S J 0 9	(日) 鉢	器高 — 口外径 — 口内径 — 胴径 — 底径 —	(口) T字形 (器) 瓶彈形 (凸) — (底) 平底	口縁部 ヨコナデ(舟型の痕跡あり) 凸帯部 — 外 面 — 内 面 — 胎 土	

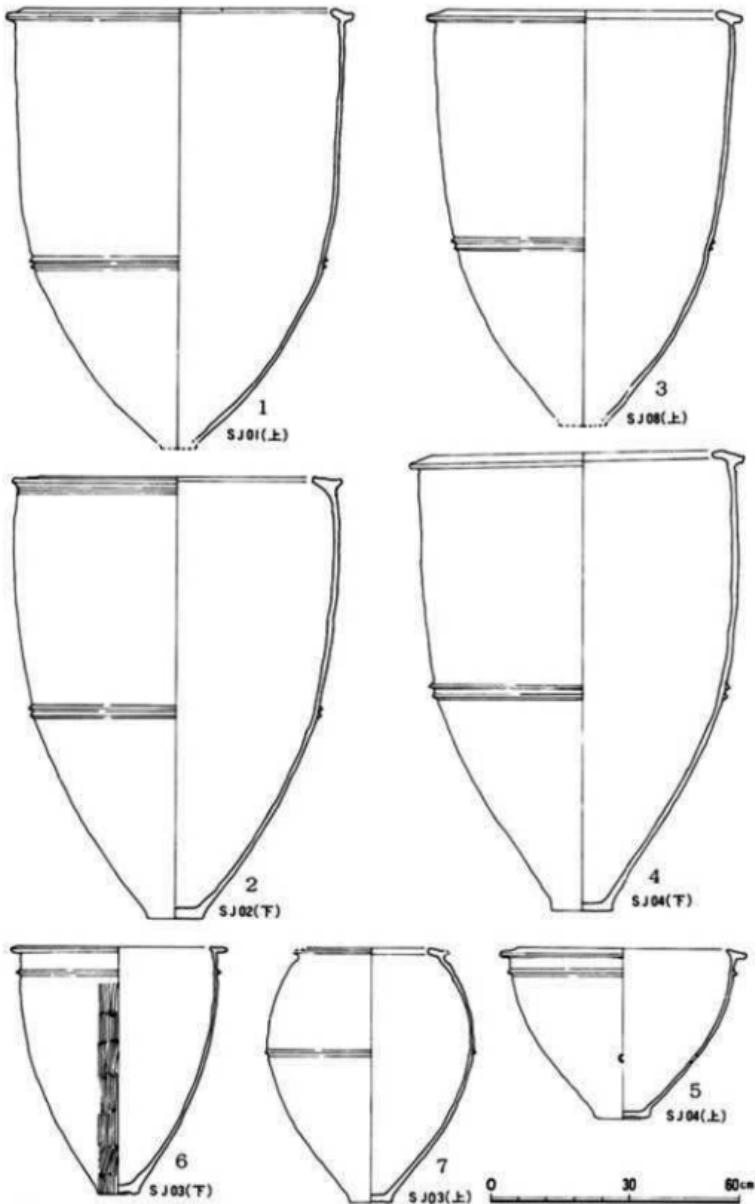


Fig. 17 池上遺跡出土鑄模實測圖

図 版



1

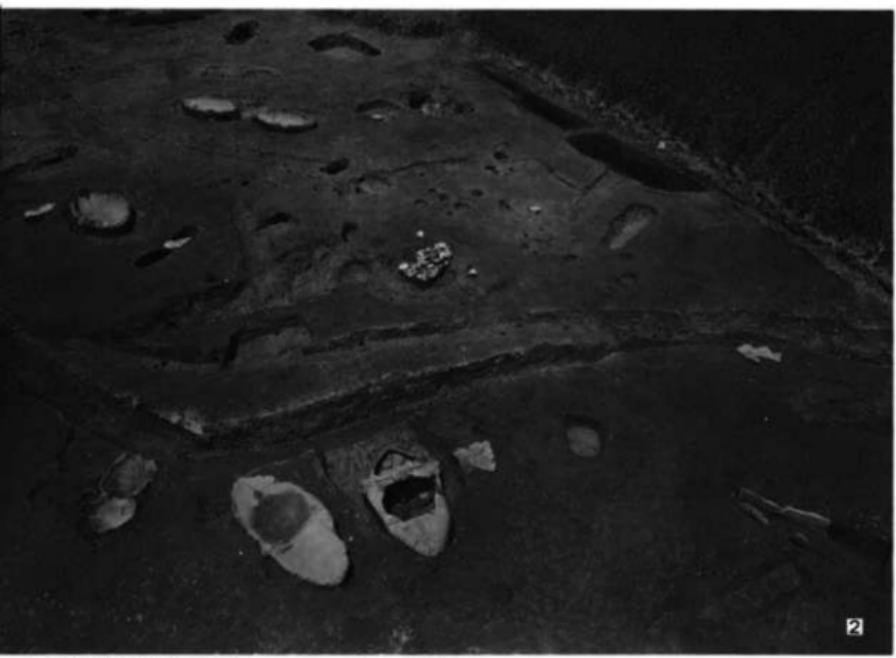


2

1. 久留間カミ塚遠景<南から> 2. 同 全 景<東から>



1



2

1. 久留間カミ塚全景<西から> 2. 同 隣接墓群<東から>



1



2

1. 久留間カミ塚東地区<南から>

2. 同 西地区<南から>



1. 久留間カミ塚 S J 03妻棺墓<西から>
2. 同 S J 04妻棺墓<東から>
3. 同 S J 05妻棺墓<西から>



1



2

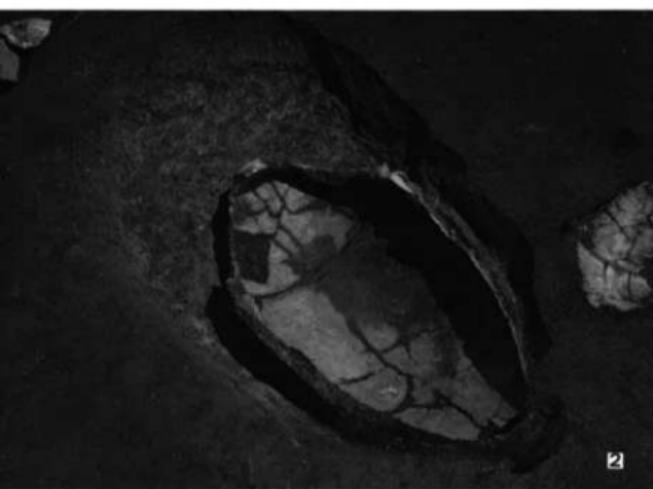


3

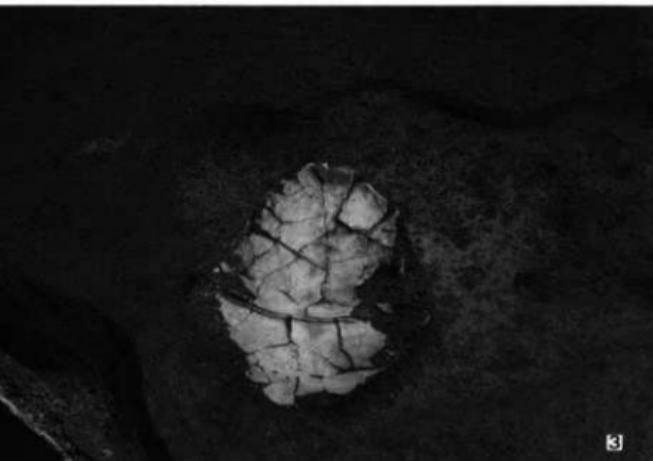
1. 久留間カミ塚 S J 05.06 妻棺墓(北から)
2. 同 S J 05 妻棺墓(北から)
3. 同 S J 05 妻棺墓(北から)



1



2

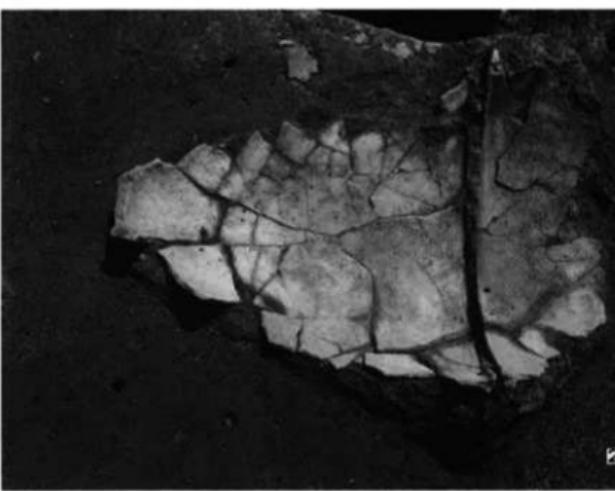


3

1. 久留間カミ塚 S J 07.08 壊棺墓(北から)
2. 同 S J 07 壊棺墓(北から)
3. 同 S J 08 壊棺墓(北から)



1

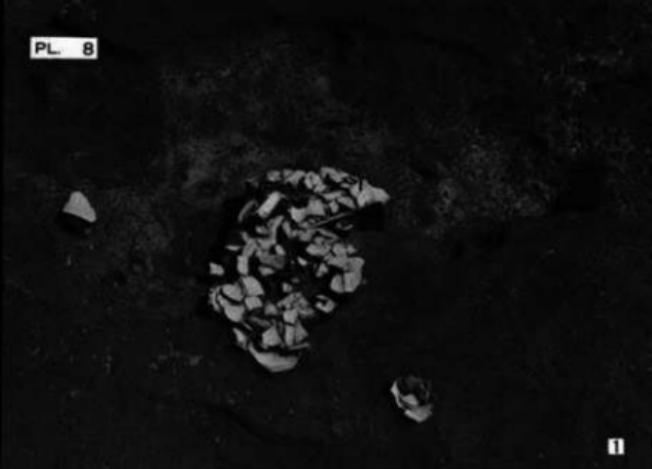


2

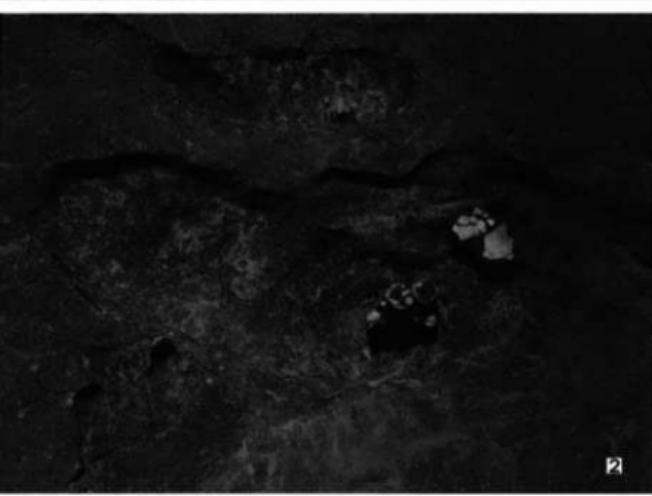


3

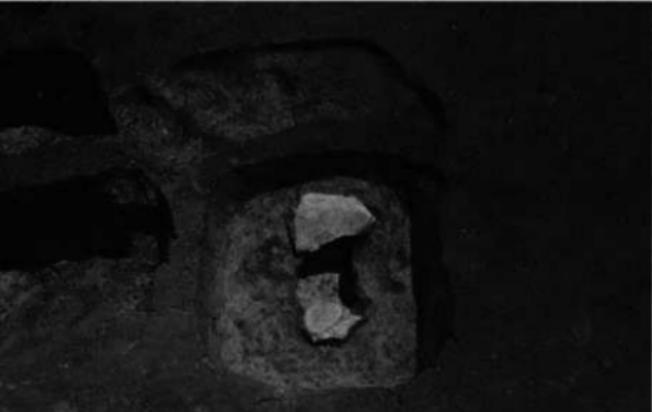
1. 久留間カミ塚 S.J.11.12.13要根基<南から>
2. 同 S.J.13要根基 <北から>
3. 同 S.J.15要根基 <南から>



1



2



3

1. 久留間カミ塚 S R02祭祀遺構(北から)
2. 同 S R01祭祀遺構(北から)
3. 同 S P02土塁墓(西から)



1



2



3

1. 久留間カミ塚SC01箱式石棺墓<南から>
2. 同 SP04土壤墓 <東から>
3. 同 SD07溝 <南から>



1



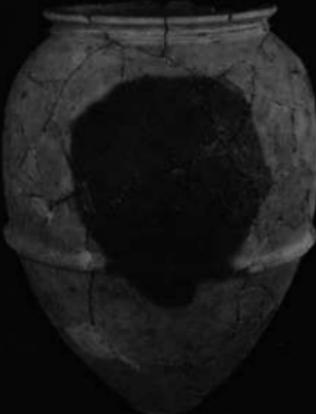
4



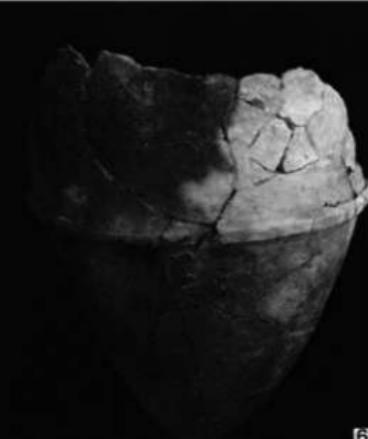
2



5



8



6

1. 久留間力之塚
S J15要棺〈下〉
2. 同
S J12要棺〈下〉
3. 同
S J04要棺〈下〉
4. 同
S J07要棺〈上〉
5. 同
S J05要棺〈上〉
6. 同
S J03要棺〈下〉



1



4



2



5



3

1. 久留間カミ塚 S J12甕棺<上>
2. 同 S J15甕棺<上>
3. 同 S J07甕棺<上>
4. 同 S J06甕棺<上>
5. 同 S J05甕棺<上>



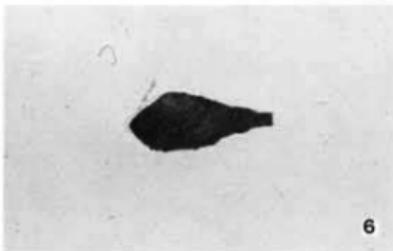
1.3 久留間カミ塚 S R02祭祀遺構出土弥生土器

2.4.6 同 S R01祭祀遺構出土弥生土器

5.7 同 SK 10土壤出土弥生土器



1



6



2



3



4



5

1.2 久留間カミ塚 S D11溝出土土器
 3.5 同 SP 04土塙墓出土土器
 4. 同 S D07溝出土土器
 6. 同 S R01祭祀遺構出土鉄鏃

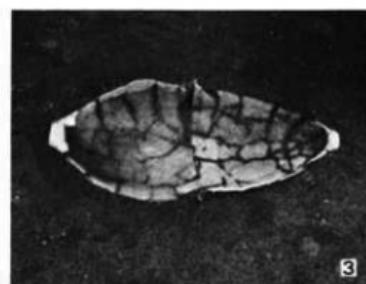


1. 池上遺跡調査区全景(南から)

2. SJ01
3. SJ03
4. SJ04
5. SJ06
6. SJ07
7. SJ08



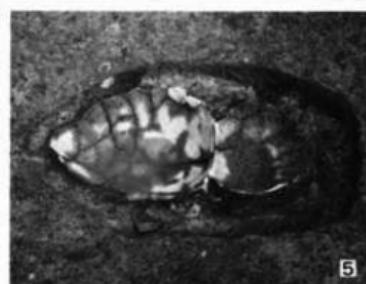
2



3



4



5



6



7



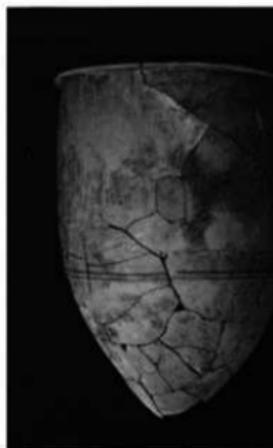
1



2

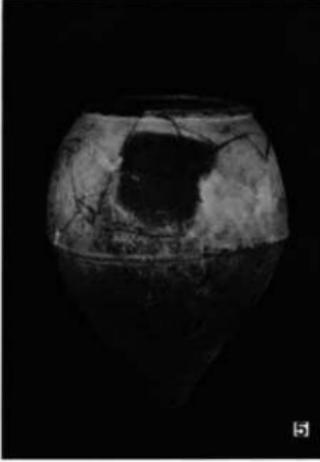


3



4

1. SJ01(上)
2. SJ01(下)
3. SJ08(上)
4. SJ08(下)
5. SJ03(上)
6. SJ03(下)



5



6

佐賀県文化財調査報告書第64集

久留間カミ塚遺跡B地点

(参考資料 池上遺跡)

昭和57年3月31日 発行

発行 佐賀県教育委員会

佐賀市城内一丁目

印刷 日之出印刷株式会社

佐賀市高木瀬町大字長瀬1136-55

